

54.8

60



始





書叢業副の味趣

篇三第

金魚とその飼ひ方

理學博士 石川千代松 序  
時事新報記者 白木正光 共著  
金魚飼養家 秋山吉五郎 著

文化生活研究會版

大正  
15. 8. 3  
内交

類 種 の 魚 金  
(畫 氏 耶 次 慶 山 横)

ソキカリ

カチソラ

ラシガ、ソソキカリ

ソガソチカラ

ラシガ、シダソラガ

ク  
シヤ  
ク  
チ

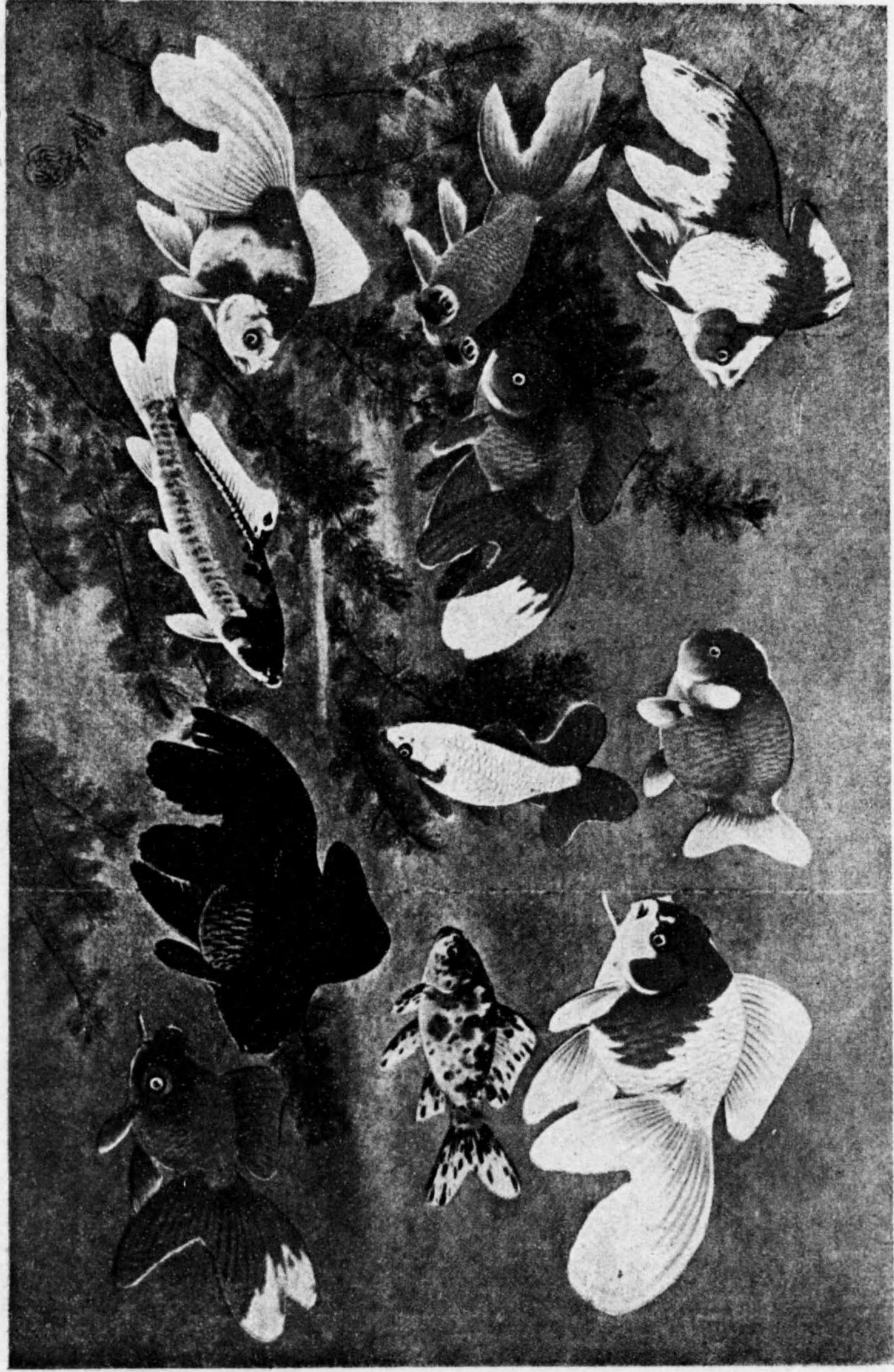
ソキノヂユシ

コリヤキ

キスリシ  
(種一の鯉)

ガチチツテ

ソキメテ



金魚の群像

(野山製丸菫)

メノナウ

リリチンミン、ヤシロ

キウチン

シシナシキ

シエチンチン

オビシシ、ヤシロ

オビシシ、ヤシロ

オビシシ、ヤシロ

オビシシ、ヤシロ  
(群像の一)

オビシシ、ヤシロ

オビシシ、ヤシロ



娘町と鉢魚金 圖一第  
筆磨歌



筆貞國 月皇語物氏源 圖二第

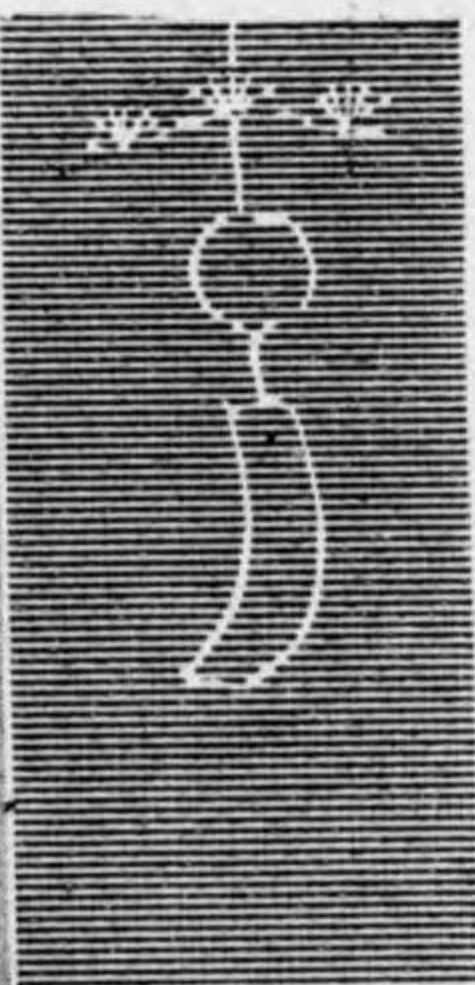


圖日緣の師藥町場茅 圖三第  
(りよ繪圖勝名戶江)

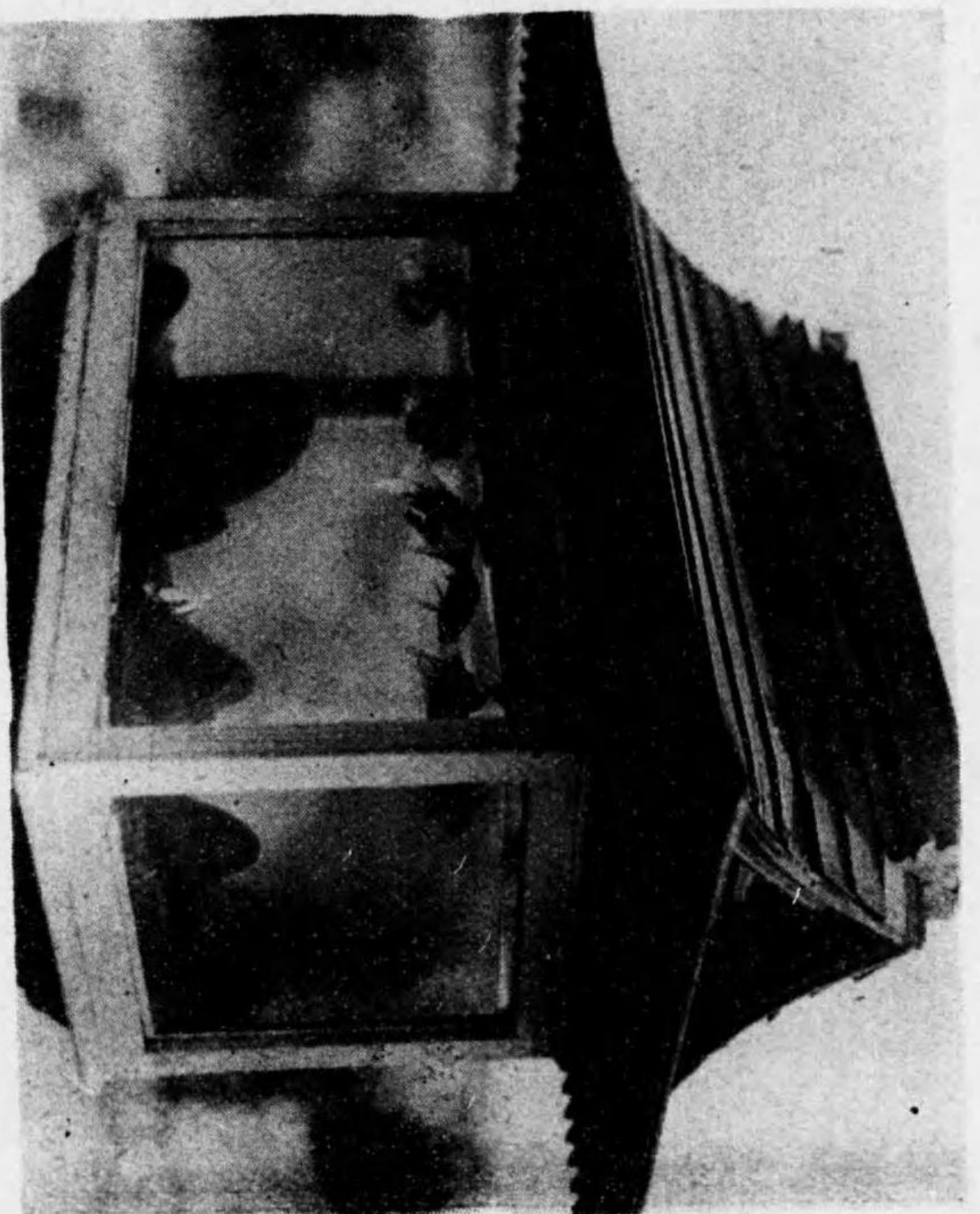


紫若屋玉角 圖四第  
筆昌榮





(りよ態百掃一)屋魚金の昔(上) 圖五第  
屋魚金の店夜の今(下) 圖六第



第七圖 燈籠形の金魚容器

## 序

此の本は金魚と其飼ひ方を書いたもので、金魚は白木正光氏の手になり飼ひ方は秋山吉五郎氏が書かれたものであります。秋山君は私は四五十年前から懇意にして居ましたし、又先年故外山龜太郎博士と一緒に金魚の遺傳を研究した時にも特別に援助を與へられ、其記事の原稿も圖も澤山出来て居たが、まだ出版にならない内に外山氏が死前何れへやられたか更に不明で今日に至るも見付らないのは残念に思つて居る。夫れは如何であつても秋

山君は普通の金魚屋さんではなく、其當時も我々の研究に大ひに興味を有せられ、自分でも澤山の掛合せ等を試みられたのである。で無論金魚の飼養法に至つては本邦では稀に見る人であるから、此人が書かれたものゝ價値は私が今日茲に述ぶる必要もないのである。

次に前篇を書かれた白木君であるが同君の事は自分は夫れ程好く知らなかつたが、今此原稿を拜見する時如何に同君が金魚に興味を有せられて、能々其習性等を研究し居らるゝやが分るのである。尤も金魚の進化の處では同君と違つた考へ方もする事が出来ませうが、之れは

理論に涉る事ですから、白木君の考へ方が穴強ち間違つて居るとも云へますまい。

であるから斯んな事は別として此書は實に能く出来たもので、金魚全體に關する知識を得ると同時に其飼養法を知るには此上もないものであると信じます。

大正十五年七月

理學博士 石川千代松識

## 序

私の大好きな金魚をむざ／＼死なせたくない。本書執筆の動機はごく簡単です。夏になるとどの家庭でも、この愛らしい金魚を飼ひますが、それが云ひ合せたやうに、ちき死なして仕舞ひます。これは金魚の飼ひ方を知らないからで、金魚を飼ふならせめて金魚の飼ひ方は心得て置いてほしい、そして可愛い金魚を死なさぬやうにしていたゞきたいと思つて、金魚のために皆様の家庭へデヂケートする意味で書いたのが本書です。

殊に愉快なのは金魚飼育の大家秋山吉五郎氏が飼育に就いて、その造詣を披歴されたことで、素人の好同伴である許りでなく、玄人に取つても無二の好参考資料であると信じます。又本書のために特に序文を寄せられた動物學界の權威石川博士の御厚意と、本書完成までに色々筆稿を煩した文化生活研究會の牧野常吉君及び社友南谷格三君の勞を感謝します。

大正十五年六月

白木正光 識す

## 目次

序

前篇——金魚

一 金魚禮讚……………一九

二 金魚は死なない……………一〇—一五

困つた偏見……………一〇

死ぬ理由……………一一

天壽を完させよ……………一三

花栽培との比較……………一三

親愛の喜び……………一四

三 金魚の美……………一六—一七

三つの美	二六	金魚と若葉	二七
美的の飼ひ方	二八	美の基點	二九
色彩の照應	三〇	金魚と水草	三一
容器	三一	箕作博士の比喩	三二
金魚と模様	三二	群れの美	三七

四 外人の日本金魚観 ..... 二八—三四

五 日本の金魚史 ..... 三五—五三

何時日本に來た	三五	金魚傳來の二説	三五
其の批判	三七	元祿七年町觸	三九
下谷池の端鎮齋屋	四〇	西鶴置土産	四〇
金魚の狂言	四二	町奴の金魚組	四三
町娘と金魚鉢	四三	東源氏阜月	四四
角玉屋若紫	四八	今様見立箱庭人形	四九
金魚屋の繪	四九	馬琴の日記	五二

六 金魚の生物史 ..... 五四—六九

金魚の祖先	五四	進化の理法	五五
住所の廣狹による變化	五五	金魚の尾	五七
變化の不思議	五九	金魚の系圖	六一
鮎の容姿	六一	鮎の習性	六三
金魚各部の名稱	六三	脊鰭	六四
尾鰭	六六	色彩	六九
變色	六九		

七 金魚の種類 ..... 七一—九四

和 金	七一	琉 金	七三
金鱗(蘭鱗)	七五	オランダ獅子頭	七九
出目金	八〇	出目らんちう	八二
和唐内	八三	秋 錦	八四
朱文錦	八五	金 蘭 子	八六

鐵尾長	九七
キヤリコ	九八
琉金獅子頭	九二
總説	九二

孔雀尾	九八
出目秋錦	九〇
頂天眼	九二

後篇——金魚の飼ひ方

八 金魚の容器

小容器と大容器	九五
三條件	九六
陶器	九七
部屋へ飾る注意	一〇〇
金魚がめ	一〇二
種類	一〇三
泉水の大きさ	一〇五
泉水の位置	一〇七
小容器	九六
玻璃器	九七
金屬器	一〇〇
大容器	一〇三
泉水	一〇五
理想的の泉水	一〇五
泉水の深さ	一〇六
新泉水の注意	一〇八

九 金魚と水

泉水と魚數	一一〇
泥池	一一〇
金魚と水質	一一三
濁りの程度	一一四
浮游生物	一一六
浮游生物と投餌	一一九
水温	一一三
濁る原因	一一五
水色の變る理	一一六
水換の理由	一一八

十 水換と注水

水換	一二九
同數	一三〇
水換の方法	一三二
掃除の仕方	一三三
注水	一三五
時期	一三五
水の濾過	一三七
水換の原理	一二九
水換と天候時刻	一三二
金魚の揃ひ方	一三三
泥池の水換	一三四
注水の意義	一三五
時刻	一三六



十一 日覆と蓋と冬圍

日覆	.....	二二六
裝置の注意	.....	二二九
冬圍	.....	二三二
圍ひ方	.....	二三三
時	.....	二二六
蓋	.....	二三〇
冬圍の程度	.....	二三一
小容器の防寒法	.....	二三三

二二六—二三三

十二 金魚の食物

生物と食物	.....	二二五
金魚の食物	.....	二二五
動物質の餌料	.....	二二七
子	.....	二二九
赤	.....	二四一
魚	.....	二四二
蠶	.....	二四三
大	.....	二四三
鮭	.....	二四四
植物質の餌料	.....	二四三
金魚	.....	二四四
鮭	.....	二四四
鮭の食物	.....	二二五
餌料の二大別	.....	二二五
微塵子	.....	二二七
あかこ	.....	二二九
貝類	.....	二四一
玉子	.....	二四二
植物質の餌料	.....	二四三
金魚	.....	二四四
鮭	.....	二四四

二二五—二四四

十三 餌料の與へ方

麵類	.....	二四四
ふすま	.....	二四四
麥粉菓子	.....	二四四
控へ目	.....	二四六
季節と天候	.....	二四七
與へる場所	.....	二四八
時刻と同數	.....	二四六
夏季の注意	.....	二四七

二四六—二四八

十四 産卵及びその前後

鮭の産卵	.....	二五〇
産卵の徴候	.....	二五一
雌雄の見分け方	.....	二五二
産卵池	.....	二五三
雌雄の組合せ方	.....	二五三
藻の危険	.....	二五七
入れ方	.....	二五八
産卵の時期、同數	.....	二五〇
親魚の選定	.....	二五一
親魚の飼ひ方	.....	二五二
産卵と天氣	.....	二五三
金魚	.....	二五六
柳の根	.....	二五八
卵の容器	.....	二五九

二四九—二六二

産卵中の注意……………	一六〇	産卵後の親魚……………	一六〇
孵化迄の注意……………	一六一	孵化……………	一六二
<b>十五 仔魚の育て方……………</b>	<b>一六三—一六八</b>		

孵化當時の仔魚……………	一六三	藻の除ひ方……………	一六四
仔魚の食物……………	一六四	一番香水……………	一六五
選別……………	一六六	變色……………	一六七

**十六 金魚屋と金魚の輸送……………一六九—一七九**

郡山……………	一六九	彌富……………	一六九
金魚屋……………	一七一	輸送法……………	一七三
金魚の小包便……………	一七三	卵の輸送……………	一七四

**十七 金魚の病蟲害……………一七五—一九〇**

病氣……………	一七五	病氣の見分け方……………	一七五
---------	-----	--------------	-----

病因の四大別……………	一七六	粗腐病……………	一七七
鰓腐病……………	一七六	松皮蟲……………	一七八
糜爛病……………	一七八	ぬまり病……………	一七八
眼病……………	一八〇	糞詰病……………	一八〇
その他……………	一八一	害敵……………	一八三
鳥類……………	一八三	五位蠶、鳶……………	一八三
獸類……………	一八三	鼯……………	一八三
猫……………	一八三	ごぶ鼠……………	一八四
蛙……………	一八四	昆虫類……………	一八五
まつもむし……………	一八五	ゆりのはなすひ……………	一八六
みづかまさきり……………	一八六	たがめ……………	一八六
子追蟲……………	一八七	たいこむし……………	一八七
すなむぐり……………	一八七	げんごらう……………	一八八
魚虱……………	一八八	あなをさ……………	一八九

前編—金魚

挿畫目次

口	金魚の種類(三色版)……………	卷頭
第一圖	金魚鉢と町娘(歌麿筆)……………	〃
第二圖	源氏物語皇月(國貞筆)……………	〃
第三圖	茅場町薬師の縁日圖(江戸名勝圖繪より)……………	〃
第四圖	角玉屋若紫(榮昌筆)……………	〃
第五圖	昔の金魚屋(一掃百態より)……………	〃
第六圖	今の夜店の金魚屋……………	〃
第七圖	燈籠形の金魚容器……………	〃



金魚禮讚

最も美しく、しかも最も可憐なもの？……と人にきかれたら私は何等遅滞なく金魚であると答へます。そして私がかう云ふ美しく可憐な金魚の居る、日本に生れたことを無上の幸福に思ひます。またかう云ふ金魚の日常見らるゝ自分の幸福に無上の喜びを感じます。この信念は三十年の昔、私が漸く物心のついた時分から、今日迄常に變ることなく續いたもので、恐らく今後も永久に變るまいと思ひます。この場合恐らくなごゝ云ふ言葉は殆んど必要のない様に思ひますが、未

來のことであるから讀者に對して假にかう云つて置くのであります。  
お、あの私の少年時代、如何にこの金魚のために小さい胸を躍  
らしたことでありませう。如何に小さい心に甘いなやみを覺えたこと  
でありませう。頃は五月、金魚の産卵當時、それが白熱に達したのを  
今も思ひ出すことが出来ます。第一その時分になると、明日の天氣が  
氣懸りでならなかつたものでした。それは金魚はお天氣のいゝ朝に限  
つて産卵するからで、大體お天氣の見極めがつくと、今度は明日の朝  
早く起きられるかゞ氣になつて、しつこい程皆に明日の朝忘れずに起  
してくれと頼みまはつたものでした。さて折角朝早く眼覺めて見ると、  
何時のまにか移り氣な花曇りが雨になつて、一日恨めしげにしとく

と降る雨を、硝子越に眺めて居たことも度々あります。またお天氣は  
よいけれど、どうしたものか産卵の氣配はちつともなくて、がつかり  
したことも度々でした。

これに反し、あの金魚の眼覺むるばかり鮮麗な色彩が、活潑に動い  
て居るのを見ますと、もうたゞわけもなく悦しくて、胸が自ら早鐘  
を撞つ様になります。そして眠氣はとつくの昔に去つて、頭はささざ  
えして居ます。

見入れば見入る程活躍して居る金魚の色彩は鮮やかで、殊に褐緑の  
金魚藻のふうはりど擴がつた中に、眞に眼のさめる紅を見出すとき、  
美の極致に達した程に、鮮やかな美しい色彩美を發揮するのでした。

かう云つて了ふと、見て居るのはなんでもない様な、恰度美しい花でも見て居るやうに思はれますが、實際は中々そんななま易しいものではなく、金魚は少しの足音にも愕いて列を亂して遁げる。少年の私はそれがなるべくさしたくないのです。五間も先きからそつと泉水を覗き込んで、産卵中の様だと抜き足、差し足して、両手を左右に擴げ泳ぐ様にして静に〜窺ひ寄つて行きます。もう一生懸命で、殆んど一命を賭して遂行すると云つた風に、大真面目になつてぬき足差し足して進み寄るのですが、真面目なだけ、その姿は可笑しく、今でもその當時を追想すると、小さい自分の滑稽な姿が浮んで可笑しくてならない程です。

かくて、ごうやら恙なく産卵が済むと、今度は卵の容器に至極困つたものです。金魚は四月末から五六月頃迄四五回も産卵するもので、これは普通三回位にとどめて置いた方がよろしいのですけれど、少年の私にはそんな考へは毛頭なく、少とでも多く生んで呉れることを願つたものです。それで一回二回迄はごうやら容器の工風がつかますが、三回四回となると、もうごうしても動きがつかない、あらゆる水の入る器物は前回の卵でふさがつて了つて居ます。苦しまぎれに、こつそり勝手元へ忍び込んで、挿鉢、兜鉢等を持ち出して、あとで叱られたことも度々ありました。

その時分の私は、金魚の卵を見て居るのが課業だつたと云つていゝ

程、卵のそばにくつついて居たものです。しかしそれが別に動くでなし、また見て居る中に變るでもなし、おきにあきが來ますが、立ち上つて見ると、なんとなく後髪を引かれる氣持になつて、また腰を据ゑるのでした。

そのうちに卵に白い星の入つたのがあつちにもこつちにも目立つて來る。これはくさつた卵ですが、折角の卵が腐つて終ふのを見て居る私の小さい胸は實に苦しいものでした。殊に白いのはよく目立つので、もう殆んど全體腐つた様な氣がして私はがっかりしたこともあります。

が、それも二三日で産卵後七八日も経つと、靜かに動かした藻の間

から、微小な、恰度うぶ毛の様な薄黒いものがちよろ／＼出て來る様になります。云ふまでもなくそれが金魚の卵から孵化した仔魚で、愈々金魚になつたのです。殊に思つたよりもその數が多いので驚喜する。忽ち元氣が出て、手の舞ひ足の踏む處を知らぬ有様で、急に爲すべき仕事は澤山ある様な氣がして、私は希望に燃え、幸福に浸つたものであります。而してその微小な未來の金魚が、茹卵子の黄味を食べて黄色くなつたのを見た時、私の喜びは絶頂に達するものでした。

東京では三月の中ば頃からぼつ／＼金魚屋の呼び聲がきかれます。そして四月に入ると何處の縁日にも、鹽や瀬戸びきの容器を澤山並べた金魚屋が二三軒は出て居るものです。その上硝子屋まで急に水槽を

つくつたり、硝子の瓶に赤や白の金魚を容れたりして、常設の小金魚屋の観を呈します。かくて都の金魚の需要は満されるのであります。

金魚屋はしかしどちらかと云ふと、晩春から夏のもので、苗賣と交じつて金魚屋の澄んだ呼び聲をきくのはいゝもので、殊に静かな午後など、讀書に倦んで窓から、ぼんやり外を眺めて居ると、何處からともなく、「金魚、金魚」の聲が流れて来るなどは、なんとも云はれぬ都會情緒のこもるものです。

この金魚屋の様子を眺めて居るのも面白いもので、場末の町の真中に荷を下した金魚屋さんは、静かに煙草をふかして立つて居ます。これらの子供が一人二人……四人五人……金魚の周圍に集まつて桶の中

の美しいのや、すきとほる硝子瓶の中で遊ぶ金魚を熱心に見入つて居る。その様を背の延びたさない顔の金魚屋はちつと見下しながら黙つて居ます。子供は殖る一方で、まもなくお主婦さん迄が、しごけな胸を掻きよせながら草履をつゝかけて出て來ます。通行人も二人三人足をとめる。竟にお主婦さんと子供と……金魚屋さんの口が動く。子供は喜んで小さい網で金魚を掬つて見たり、硝子瓶を眼の高さまでもち上げて見たりします。かくて二組三組、硝子瓶を下げた子供の手を曳いて、お主婦さんが歸る頃、金魚屋も荷をかつぎ上げ、黒山の群集も解散で終ふのでありますが、夏の間、誰もかゝる情景は屢目睹することでありませう。



二 金魚は死なない

困った偏見——金魚は容易に死なない、見掛けによらぬ丈夫な魚でありますが、多くの人は此金魚をごくひ弱い、至つて死易いものゝやうに誤解して、そして金魚を飼ふのもよいが面倒だからとか、見すく殺すのが可哀相だからとか云つて、頭から飼ふのを躊躇します。誠に困つた先入主でありますが一層困る事は、かゝる先入主に囚はれて、假令金魚が死んでも、當然のやうに思つて顧みない事です。さんざん可憐な金魚を虐待、死に到らしめて置きながら、猶且つ金魚のひ弱い

せいにして、自分の殺した事にちつとも気がつかないなどは、なんと云ふ可笑しな話でせう。

死ぬ理由——金魚は決してそんなにひ弱いものでも、直死ぬものでもありません。只小さい容器に無暗に澤山入れるとか、矢鱈に食物を食べさすとかするから、生理的に弱つて死ぬのであります。これは恰度我々が狭い密閉した部屋に多人数居ると頭痛がしたり、食物を無暗に食べれば胃腸を悪くするのと同様で、何等怪しむに足らぬのであります。金魚の飼養に限つて、その邊の調節の甘く行かないのは、要するに金魚に就いてまだ十分の知識がないからであります。換言すれば世人が金魚の飼養に就いて、餘りに無智、無關心であることを、裏書

してゐるやうなものです。例へば草花にしても、毎日遣水の必要な位は誰も承知して居ます。處が金魚になると、草花に毎日水をやるだけの手數も、心得て居ないのであつて、大抵は只餌料をやれば大きくなる位の淺墓な考へから、無暗に餌料を與へ、却つて金魚の死期を早めて居るのであります。そして金魚はひ弱いの、直死ぬのどこぼして居るので、滑稽と云ふよりも、寧ろ一種の罪惡と云ふことが出來ませう。天壽を完させよ——併し私は今これが罪惡であるか、ないかを云々しやうとするではありません。唯可憐な金魚を、かう云ふむごたらしい運命に翻弄させずにその天壽を完ふさせたい、そして金魚の先天の美を十分に發揮させたいと云ふ見地から、前記の偏見を一掃すれば足

るのです。本書の後編『金魚の飼ひ方』には、専ら金魚飼養の諸注意が述べてありますから、金魚飼養者は是非これを熟讀されたいものです。

花栽培との比較——すると又金魚の飼養はそんなに面倒な、小六ヶ敷いものかと云ふ人があるかも知れません。それ等の蒙を啓く爲めに、私は今一度草花に例を取りたいと思ひます。近來一般の家庭、殊に婦人の間に草花の栽培熱が昂つて、自ら草花を栽培する婦人連も少なくありませんが、その草花は植物の中でも一番手數のかゝらぬ、栽培の容易いものとされて居ります。而も立派な花を咲かす爲めには、毎日水を遣る必要があります。場合によつては日除もせねばならず、又時

々は施肥の必要もあり、芽を摘み枝を刈る事も忘れられない仕事の一つで、又假令室内に飾るものでも、置きりではちき萎むから、毎日屋外に持出して、夜露にあてる親切もなければなりません。もしそれ自ら種子を播いて、苗から育て、行くなら、苗床の用意は勿論、土から吟味してかゝらねばならず、生長する迄には、雨露風霜の世話から、病蟲害の手入れに至る迄、實に種々雑多の煩はしさと、細心の注意が要るのであります。而もそれ等の煩はしさのために花が嫌になるかと云ひますと、反對に却つて愛着の念を深めるもので、慈しみの情も自ら昂まるのであります。

親愛の喜び——金魚も全くこれと同じで、愛すれば愛する程親しみの

念が加はり、殊に金魚は無心の花と違つて、主人に次第になれ慕ふやうになりますから、一層興味の加はるものです。そして親切に注意深く金魚を見守つてやると、自然と金魚の氣持も判つて来て、實に愉快なもので、彼等の喜ぶ様、苦しい氣持、それ等も彼等の姿態の表情から汲み取ることが出来ます。かうなれば金魚は主人の足音をきいて大急ぎで泉水の縁へも寄つて來ますし、初めて金魚飼育の眞髓に達せられたと云ふことが出來ませう。そして金魚の心理を研究するのも一興で、親切に見守つてゐれば、色々の全く思ひがけない彼等の心理状態が判つて來るものであります。

### 三 金魚の美

三ツの美——金魚の美は大體色彩美と、形態美と、動的美の三つに分けることが出来ます。而して金魚の色彩美は濃麗であり、鮮美であります。眼の覺める様にあざやかにくつきりして居ます。次の形態美は優麗、艶美で、如何にもやさしくたほやかな容姿をして居ます。最後の動的美とは運動美のことで、あの金魚の典雅な運動振りが、金魚の色彩美、形態美と相俟つて、ノールな愛らしさをどれ程増すか知れません。この動的美と形態美とは、合して又金魚の容姿美と云ふこと

が出来ます。

金魚と若葉——金魚の色彩美は、若葉の緑濃やかな五月頃、その若葉のなま／＼しい緑と、金魚の生々した眞紅とが相映發する時、その極致に達すると云ふことが出来ませう。一體若葉の新緑も、金魚の眞紅も、共にちつとも凝滞のない、明るい氣持の、そして何處となく若々しい情趣の籠る色彩美であります。而も兩者は全く反對の働きを持つて居て、若葉の新緑は、ごちらかと云ふと淡彩であり、柔か味があり、穩やかな落ちついた趣きがあります。また若葉の性質として、そこら一帶を新緑で填めて居ます。即ち新緑は廣汎の美であり、靜的の美であります。處が金魚の色彩美は、只一點に凝聚する處に、その生命が

あります。しかも動的で、その色彩美は強烈絢爛を極めたるものであつて、前者の淡彩の穏やかな色彩美の中に、この強烈絢爛を極めた數點の色彩美の浮動する時、若葉の緑も一際美しく鮮やかさを増せば、金魚の色彩美も、これに依つて生きて來るのであります。換言すれば若葉も金魚を俟つて、その緑が一層美しくなれば、金魚も若葉があつて、初めてその色彩美は愈々鮮麗の度を加へるのであります。この意味から、私は若葉の蔭に金魚を見るのが一番好きです。

美的の飼ひ方——金魚を飼ふにも、只飼つて居るのではつまらないと思ひます。恰度生花を習ふものが、それに拂ふ位の苦心は、金魚の飼養にも當然拂つて貰ひたいと思ひます。金魚の美しさは、今も云ふや

うに絢爛な色彩美と、可憐な容姿美とでありますから、金魚を飼ふなら、その美を最もよく生かせる工夫がありがたいのであります。そのためには生花に一年若くば數年のお稽古が必要である如く、そして花と部屋と、部屋と花瓶と、花瓶と花との調和と云ふ事も大切である如く、金魚にも同様の用意と準備が拂はれてよいと思ひます。少なくとも、その位慎重に考へたら、金魚は室内裝飾として、何よりも優れたものとなるであります。全く只ぼんやり金魚を硝子鉢に入れて、窓際に置くなどは、折角の金魚の美を半減する、考へなしの仕業と云へませう。

美の基點——偕てこの金魚の美を發揮するには、大體生理的及び人工

的の二つから考へなければなりません。生理的とは進化論の理法に依つて一層美しい金魚を創造したり、飼養法を研究して、出来るだけ生々とした美しい金魚を創り出したりする方法です。又人工的とは、人為的に金魚を美しく見せる方法で、前者のすぐ誰にも應用の出来ないものであるのと違つて、これはその人々の頭次第でいくらでも生かせる方法であります。そしてその手段も色々あるのでありますが、大體色彩の照應及び容器、この二方面に成功すれば、最も所期の效果に近いものが得られると思ひます。

色彩の照應——ところで、金魚の美は前にも云ふ如く、あかるい色彩美と、優美な容姿美にあるのですから、金魚を飼ふには、それ等の十

分鑑賞出来る成るべく光線のよく透る處でなければなりません。水も出来るだけ清い、澄んだ水で飼ひたいものです。暗かつたり、水が濁つて居ては、折角の美しい金魚も、その美を十分發揮する譯には行きません。併しいくら周囲が明るく、水が澄んで居ても、金魚の色彩美は一方凝聚の美でありますから、周囲が散漫では、眞の美を發揮する力に乏しいものです。即ち色彩の照應と云ふことが必要となつて來ます。なにか背景となる色彩が欲しいもので、その背景となる色彩と映發し、その色彩中から浮き出して、初めて金魚は最も艶美を極めるのであります。例へば金魚の入つた硝子鉢を、緑の布で覆つた臺の上に置けば金魚は美しくなります。又同じ金魚でも、赤ちやけた壁の床間

に置くより、黒か青味が、つた壁の床間に置いた方が美しく見えるものです。

**金魚と水草**——池にあつても、金魚藻等の水草がふうはり、ふくよかに伸びた中を、豊艶な金魚が長い尾を引きながら静かに動いてゐる態は中々美しいものです。又雨の日、點々雨滴が描く波紋の下に、ざれる金魚を見るのも風情があつて美しいものです。殊に澤瀉などの水草の青い軸を背景にした金魚を見るのは美しいものです。尤もこの場合でも、水は常に澄んで清しくなければなりません。水がきたなく濁つて居ては、折角の金魚の色彩もぼんやりして死んで了ひます。それで硝子のツン筒に金魚を飼ふにしても、たゞ入れて置くだけでは風情の

薄いもので、例へば底に綺麗な小石を敷くとか、それから數莖の藻を生して置くとか、或は盛花風に草花をあしらふとかすると、すつと引立つて室内装飾の意義にも適つて來るのであります。

**容器**——容器とても同じ事で、成るべく金魚を美しく見せるもの、金魚の色彩の照應を助ける様な容器を工夫したいものです。そしてそれが室内用の容器なら、部屋に置いても殺風景でない。部屋のすべてに調和し、その上雅致のあるものでありたいと思ひます。

**箕作博士の比喩**——故箕作博士は、金魚を緋の長袴をはいた昔の官女に譬へられました。博士は長い緋の袴をはいて、雅やかな中に、何處となく威儀の備つた官女の姿に、金魚は如何にも彷彿して居ると云つ

て居られるのでありますが、私はむしろ色彩と線との感覺に豊かであつた、藤氏全盛期の上流婦人に擬したいと思ひます。あの時分は日本の歴史中でも一番才媛の多數輩出した、婦人にとつて最も恵まれた華やかな時代でありました。學問、遊藝、容貌、何れも人並すぐれて、着るに色彩の美しい十二重用ひ、生々とした顔は豊頬、後に漆黒の髪を長く垂らして、そして何處までも女性らしいやさしさの中に、ごことなく犯しがたい威儀見識を備へて居た。そこが金魚と如何にもよく似通つて居るやうに思ひます。全く金魚はやさしい女性的の魚で、誠に艶やかで美しい魚ではありませんが、その美には淫蕩的ならけた、又挑發的な何物をも含んで居ず、あくまで清淨な犯しがたい女性美を

發揮して居るのであります。

金魚と模様——金魚を模様に應用した例は、餘り見受けないうやうでありませんが、長襦袢、半襟、帯上げ、若しくは婦人の夏の座布團、女の兒の浴衣等に應用したら存外面白いものが出來さうに思ひます。金魚は云ふ迄もなく夏のもので、金魚そのものゝ色彩には、或は涼しさが乏しいかも知れませんが、併し水を連想する事、及び色彩の照應に依つて、如何にも涼しげに見ゆるものです。模様に應用する場合には、その精神を汲みたいもので、例へば藍色の地色に、二三の絢爛な色彩の金魚を浮出させれば、如何にも涼しい氣持いゝものとなります。尤も藍色の濃淡は人の好みにより、年齢によつて色々に變化してよろしく、



また藍色の濃淡によつて、水の運動を現はすのも面白いと思ひます。その上にあつさりと淺緑で水草をあしらつてもよく、ともかく夏のものですから、見た眼の如何にも涼しく、あつさりしたものにしたいと思ひます。餘りに意匠をこらし過ぎ、ごてくしたのでは、却つて暑苦しくなります。この精神を具體化した代表的のものに浮世繪畫帖中の縦繪「らんちう圖」があります。紺藍の水は、濃淡によつて大きく波紋、若しくは流水の趣きが描かれて居り、波紋の淡彩の部分に三尾の二歳位の赤いらんちうが上下に、それぐの方向に游いで居ます。そしてその下に淺緑の短い金魚藻が簡單にあしらつてあります。その藍と紅と緑の照應、それがごくいやみのない、落着いた音無しやかな

な色彩で描かれてゐて、如何にも夏の模様として上々のものであることを思はせました。

群れの美——更に池や泉水に飼はれた金魚には、群れとしての運動の美しさのあることも見のがせません。金魚が澤山一つ容器に飼はれてゐる場合、碁石でもふりまいたやうに點々泳いでゐるかど云ふと大違ひで、大體一つの群れをなしてかたまつて容器の中を泳ぎ廻つてゐるもので、その運動は實に規則的で、恰もリーダーするものがあるかの觀があります。殊に冬の小春日など、金魚の運動の緩慢な時分には、一層密團となつて動いてゐて、驚く程綺麗なものであります。尤もこれは養魚池などでなければ見られぬ壯觀です。

#### 四 外人の日本金魚観

『日本の金魚』の著者エム・スミス氏は彼の著書中に次のやうに述べてゐます。

「日本人は金魚の熟練な天才的飼養家とも云ふべく、彼等の飼養法は獨創で巧みで、しかも最も成功したものである。即ち彼等が長年月の間につくり上げた金魚は、實に驚くばかり綺麗な、たほやかな情趣の裕なものである。」と、スミス氏は咏嘆の語をもつて初め、更に語をついで、「全く日本人と金魚とは離すべからざる親密な間柄であつて、こ

の金魚は日本人の日常生活の重要な一部分を占めて居る。もと吾人の娯樂裝飾的の目的で飼養する小動物——例へば猿、猫、小鳥、鳴蟲、河鹿、龜、鯉等の如き小動物——には種類が澤山あるが、しかし日本の金魚程廣く一般の要求に適ひ、大多數飼養されて居るものはない。同時に金魚を愛する日本程、只娯樂裝飾が目的で、直接必要もない小動物を愛する國はない。また金魚程人間に親しみ、人間の手で美しく改造された動物も尠い。

實に不思議な程であるが、日本に於ては漸く物心のついた數歳の小兒から、世の辛酸を舐め盡した白髮の老人に至るまで、皆いたく金魚を愛し、それに依て多大の慰藉を得て居る。またあらゆる社會——僅

か十呎四方程の小屋に棲む貧しい家庭から、王侯の生活を営んで居る上流社會の人々に至るまで、皆喜んで金魚を飼養し、それによつて慰さめられて居る。それ故小兒が數錢で二三の金魚を買つて喜んで居る一方、富豪は一番の金魚に數百金を投じて惜まないものである。本當にかゝる廣汎な要求に適ひ、趣味に投ずるものがこの世にまたあるであらうか。

全くスミス氏の云ふ通りです。彼はなほ語をついで金魚屋に卸賣屋と小賣屋との二種あることを語り、小賣屋を話す序に、縁日の金魚のことに説き及んで居ます。

「縁日とは町の兩側を數呎づゝに區切つて、そこに色々小綺麗な

店が急に數百も居並び、それを附近の人々が恰も待ち焦れて居た様にぞろ／＼見物に出掛ける、一種の夜祭とも云ふべきものである。金魚屋も直徑一呎半位、深さ三四吋、内側の白い丸い桶を二列に十數も並べて、それに小さいの大きいの、色々に區別した金魚を美しく游がせて客を待つて居る。普通金魚屋は金魚のほかに、子供の喜び相な鶏卵大の可愛い錢龜や、小さい緋鯉も持つて居る。また藻や、金魚の餌料の子子、あかこなども浅い桶に容れて居て、客の需めに應じて一錢二錢と賣るけれど、金魚屋の主要な商は無論金魚であることは云ふまでもない。

子供達はその白い容器に、明るく反映した美しい金魚の多くが、美

しく參差する様を見ると、早速その前に釘付にされ、暫時熱心な憧憬の眼光を、そのやさしく動く美しい動物の動搖に投げて居る。何時か彼等はその前に蹲まつて、金魚屋の貸してくれる小さい網で、澤山の金魚の中から、自分の氣に入つた金魚のいくつかを掬ひ出して居る。そしてその夜小使に貰つた數錢と惜しげもなく交換して、いそぐと家路を指して歸つて行く。かくて無數の金魚が子供の慰みに買はれて行くのである。

こゝに日本人の金魚の需用の如何に根強いかを示すいゝ話がある。それは日本がまだ封建時代であつた頃の話であるが、或年大飢饉があつて餓死するもの數千人の多きに及んだ。それにも拘はらず、何等生

活に直接關係のない金魚の需用は、平年と左程違はなかつたことである。かく日本人が異常に金魚を好愛するのは、日本人の性情のしからしむる處で、換言すれば日本人の特色そのものを啓示するものと云つてよい。その日本人の特色とは純なる美を熱愛する性情で、これは日本人のあらゆる階級を通じて存在して居り、しかも他の國民には全く缺けて居るか、或はあまり發達して居ない性情である。實際日本人が金魚の美しい色彩、艶麗な姿、優美な運動を見て大層愉快に思ふのは、彼等の美的性情のしからしむる處で、こゝでまた東洋に於ける金魚飼育の二大國民性が明瞭に區別される。即ち支那人は只徒らに珍奇な金魚を創るを主眼とし、日本人はあくまで優麗な金魚をつくるを目

的として居る。」と大體こんな風に彼は見てゐるのであります。

### 五 日本の金魚史

何時日本に來た——金魚は何時頃日本に來たものか、もしあの感能に陶酔した平安朝時代の大宮人がこの金魚を見たら、定めし大喜びに歡んで、歌に詩に盛んに思慕の情を寄せたでありませうが、何等さうしたことは傳つて居ません。降つて鎌倉時代、足利時代に入つても、更に金魚の名は見當らないやうです。漸く徳川時代に及んで初めて金魚に關する様々の説話が聞かれます。

金魚傳來の二説——この金魚が初めて日本に渡來した年代に就いて大

體次の二説があります。

一、この魚たるや何の頃より本朝に渡來せしや、其故を知る者曾てきかず、遺憾こゝに年あり。近日或る翁語つて曰く、人皇百五十代後柏原院の御宇文龜二年正月二十日始めて和泉國堺の津に渡來し、時人珍魚なりとして來由を記録せしに、何れの秋か亡失し畢ぬ。(金魚愛玩經驗録)

二、大倭本草に昔は日本に之なし、元和年中異域より來る。今世に飼ふもの多しといへり。(嬉遊笑覽)

さて文龜二年は紀元二千百六十二年、足利十二代將軍義澄公の時代です。恰も應仁の亂後で、將軍の威信は土に墜ち、國政愈亂れて世

は漸く戰國時代に移らんとして居ました。また第二説の元和年中は二千二百七十五年から二千二百八十三年で、將軍は徳川二代の秀忠公、漸く殺伐な戰國時代を脱して、泰平無事な徳川の御代に入らんとする秋でありました。

其の批判——けれどもこの二説がどれだけ確たる據どころがあるか、それは甚だ疑はしいと云はねばなりません。しかしながら足利後半期は、例の八幡船が跳梁して、盛んに支那南洋を荒し廻つた時代で、それだけ外國との交通が頻繁であつたのですから、その頃金魚はなにかの機會で輸入されたと考へられない事はありません。そしてこの考へをもう一步押進めて、併しその時分は日本は戰國で、群雄割據して各

々兵を構へて居たから、折角金魚が日本に來ても、その土地以外に踏出す機會が得られなかつた。それが、徳川の治世になつて初めて各地方に傳播したと想像されないこともありません。

とにかく足利時代には、何等史實にその名を聞かなかつたものが、徳川時代に入ると間もなく廣く一般に飼養されてゐたのを見ますと、どうしてもその頃に來たものでなければ理屈が合はなくなります。一方徳川時代、それも可なり早い時分に、金魚がもう一般に飼養されて居たのから推して、この金魚の傳播は餘程迅速に行はれたとも見られます。そしてこの傳播の加速度が、金魚に對する當時の人心の好尚の熱度と正比例したのは云ふ迄もありません。

元祿七年町觸——この金魚が日本人の生活に具體的に入つた最初の例は、元祿七年——二三四——の町觸「江戸中金魚銀魚所持致す魚の數委細に書き付差出すべく候旨持候者候ても苦しからず候間遠慮なく有體に書付出すべき旨仰せられ度候」であります。そしてその願末に就いては「元祿寶永珍話」が仔細を語つて居ます。同年（元祿七年）十一月十日江戸中にて御取上げの金魚銀魚七十程もありて去る九日御徒目付に仰せつけられ藤澤遊行寺へ持ちまかり越され泉水へ放申候今日歸府云々。」これで見ますと、この時分江戸はもう一般に金魚が飼養されて居たのであつて、その時分の江戸の水に、既にこの金魚が豊艶な色彩を誇りつゝ、ゆらく泳いで居たのであります。

下谷池の端鎮鑰屋——その上、元祿七年よりもなほ二十年も前の延寶五年の印本『江戸雀』に「下谷池の端仲町といふあたりは兩かた町とあはれど、今の如く家屋たちつゞきたる所にはあらず、植木屋などありし様なり。此所に鎮鑰屋といふ金魚屋あり。是金魚屋とよぶものゝ初めなるべし。」と立派に出て居ますし、この頃の作句（『俳諧向の岡』延寶八年——二三四〇——印本）に「最涼し金魚の光り鎮鑰屋」とある處を見ましても、餘程前から江戸に金魚が居たことがわかります。西鶴置土産——而してこの金魚を初めて見た當時の人々の思惑その他は、西鶴の歿後に刊行した『西鶴置土産』が最も適確に語つて居ます。「黒門より池の端を歩むに鎮鑰屋市左衛門とてかくれもなき金魚銀

魚を賣るものあり、庭には生舟七八十も並べて溜水清く、浮藻を紅くどりて三つ尾はたらき泳なり。中にも尺にあまりて鱗の照たるを金子五兩、七兩に買もどめてゆくを見て、又遠國にない事なり。是なんだ名の若子さま、御慰になるぞかし。何事も見た事なくば嘶にもなりがたし、とかく人の心も武藏野なればひろしと沙汰する所へ、田夫なる男のちいさき手玉のすくひ網に小桶を持そへ此宿に来るを、何ぞとみれば棒ふりむし。これ金魚の餌ばみなるが一日に仕事とりあつめて、やうく錢二十五文に賣りて、又明日持つて參るべしと、下男ともに輕薄言ひて歸る。「これを見れば、西鶴の生きて居た頃には、もう生舟を七八十も持つた立派な金魚屋があつたことが判ります。殊に興



味の多いのは、その時既に金魚の餌料を集めて生計を営むものゝあつた事です。なほこれを見ると、前の元祿寶永珍話の七十はあまり寡少過ぎて、なにかの間違でないかとも思はれます。何故なら西鶴は珍話にある事件より一年前の元祿六年に死んで居るからであります。金魚の狂言——なほ置土産の目次に「金魚の狂言もふるし」といふ事があります。

「此の狂言とは金魚が水中にて尾をふり鰭を動し、さまざまに宛轉するを云ふなり、今菊を作るもの菊の狂咲して花形を變ずるを「藝がある」といふに似たり、貞享五年——二三四八——の印本「好色盛衰記」三十卷に又の日は金魚を生舟にあつめ、狂言をさせけるが、

是もつひ水になして云々、又（新續大筑波集）——萬治三年——二二二〇——に「おどれるや狂言金魚秋の水」——（柳亭雜記）  
等とあるのを見ましても、この時分既に金魚が人口に相當膾炙して居たことがわかります。

町奴の金魚組——又徳川初期の町奴に金魚組と云ふのがありました。これは強い紺屋町の連中を云つたもので、このの興りは棒振蟲の綽號のあつた夜警連中をもへこますと云ふ洒落から、強い紺屋町の連中を金魚組と云つたのであります。これによつても、金魚が既に一般的に知られて居たことが立證されます。  
町娘と金魚鉢——これ等の時代からやゝ下つて、錦繪には金魚を描い

たものが可なりあります。中でも哥麿が享和二年頃——二四六二——に描いた『町娘と金魚鉢』の圖は最も優れたものでありませう。私に見たのは縦繪一枚ですが、向つて右下方に金魚鉢の一部が見えて居ます。一部ですから確かなことは云へませぬが、見たところ餘程大きい長方形型の底の浅い金魚鉢で、廣い縁があります。中には三、四歳の可成り豊麗な琉金らしい金魚が五六と、ほかにめだかららしい小魚とがゐます。そしてその金魚を女の子が左の袖を二の腕までたくし上げて、掬はうとして居る圖で、女の子の後には裾模様の振袖を着た婀娜な女が、左手を疊に、右手には三升模様の團扇をもつて立膝の儘軽く眇目を送つてゐます。如何にも夏らしい、そして涼しげな圖柄で、流

石哥麿の滋味が領かれます。

東源氏皇月——降つて一壽齋國貞も金魚を描いてゐます。それは縦繪横三枚續の『東源氏皇月』の圖で、中央にさし渡しかれこれ四尺もあらうと思はれる碗形の清水焼らしい大鉢があつて、黒塗の臺の上に置いてあります。中には水が満々と充されて全體眞紅な金魚、斑の金魚、白い金魚、色模様様々の金魚が十程も泳いで居ます。而もその金魚は何れも身體が太つて背鰭のない處から推すと、金鑄を描いたものでありませう。金魚のほかにめだかも列をして游いで居ます。其の上向つて左手寄りには金魚藻が繁らしてあり、それに對し右方には花蓴菜らしい水草が緑の丸葉の上に四瓣の黄色花をいくつもいくつもつけてゐ

ます。鉢の内容はその位にして、さて鉢の前には頭に菖蒲葉の鉢巻を  
し小袖に、袴を穿いた男の子が左手に持った茹玉子を右手で碎いて鉢  
に投げ入れてゐます。その左右には父親らしい人物と、母親らしい大  
丸鬘の湯上り姿の婦人が子供の方に慈愛をこめた眼光を投げて居ま  
す。なほその婦人の背後には、團扇を風車のやうにとりつけたもので  
風を送つて居る娘と、亂箱を運んで來る小女が描いてあります。すべ  
てこれ上流家庭に於ける菖蒲の祭りの趣きを寫したものであります  
が、涼しい金魚鉢と、浴後の美人の取合せに畫的效果を極度迄上らせ  
てゐます。のみならず鉢の外側に描かれた藍色山水も、この點で見逃  
す事の出來ないもので、それは港灣の景色を描いたものであるらし

く、左方遙に山があつて、その上の雲間から月が顔を顯して居ます。  
そして中央の際涯のない渺茫たる大海原には、波を蹴立て、港に歸る  
大小の帆船と、前景に千鳥が二羽低く波にすれぐれに飛んでゐます。  
その畫が藍色山水であるだけでも既に一脉の涼味を感じるのでありま  
すが、更にその涼しい藍色山水と、絢爛たる色彩の金魚との照應、及  
び外は洋々たる大海原を現し、内は可憐な金魚鉢となつて居る繊細な  
感能の働きは、全く尋常人の企及し難いものがあります。尤もその  
頃は金魚の飼養が流行つて、それ位の心掛けは誰ももつて居たのかも  
知れませんが、とにかく私はその時分に斯程迄金魚の美を會得して、  
その極致を表現し得たのを至極嬉しく思ひます。

角玉屋若紫——以上の他に金魚を描いた錦繪の二三を擧げますと榮之の高弟、鳥高齋榮昌畫の錦繪一枚もの「角玉屋若紫」一勇齋國芳畫の縦繪横三枚續きもの「今様見立箱庭人形」に金魚が畫いてあります。前者は寛政年度の作で、圖柄は藍染の市松縞の浴衣を着た瀟洒な浴後美人が、手に一尾の大きい金魚の入った玻璃器をのせて、それを餘念なく眺めて居る圖であります。今日では玻璃製の金魚鉢は珍らしくありませんから別に何んでもないやうであります。その頃は和蘭渡來の高價なぎやまんであつて、そのぎやまんに金魚を容れたところに萬金の誇りがあり、餘程の豪華贅澤なものだつたに違ひありません。

今様見立箱庭人形——後者の「今様見立箱庭人形」は畫面一杯に大箱庭の態が描いてあります。すべて林泉の景致で、前面には池水を湛へ後半には築山がありますが、その池には金魚がこゝかしこに二三匹づゝ群をなして戯れて居ます。金魚の数はすべて十五、何れも色鮮かな紅白の美しい斑であり、尾も琉金らしくふくよかであります。但し背緒のないところを見ますと、金鑄であつて琉金とは云へません。一番今日の秋錦にあてはまるのですが、秋錦はもつとすつと後に出來た金魚と云はれますし、これは金魚の發達史を調べる人の面白い參考資料だと思ひます。

金魚屋の繪——次に金魚屋を描いたものに、紅翠齋北尾子畫山東京傳

子讚の『四季交加』——寛政十年——があります。その四月の條に、  
饅頭傘を戴き、尻端し折り、脚絆、鞋ばきと云ふ出立の金魚賣りが晝  
いてあります。彼の肩には植木屋の荷かつぎ臺の様な四つ手の臺の下  
つた天秤棒がのつかつてゐて、前荷には桶が大小二つ程重ねてありま  
す。なほ詳しく云ふと、桶の脇には茶碗らしいものがあり、桶の蓋の  
簀子の上には掬網がのせてあります。それから後荷は大桶一つの上に  
四角な箱があつて、その中から恐らく金魚の餌料や藻を入れたらしい  
二二三の丸い容器がのぞいて居ます。傍の初鯉賣りのいなせな若者が、  
勇ましく驅けてゆくのど違つて、これは悠長な足どり、暢氣さうに  
町を呼賣してゆくらしいのです。そこに世態を寫して、云ふべからざ

る面白味があります。

又『江戸名所圖會』茅場町薬師縁日の圖中にも金魚屋が描いてあり  
ます。この圖は薬師の植木市の様を描いたものでありますが、其の植  
木屋に挟まれて、一軒の金魚屋が桶をぶらりと並べてゐるのです。金  
魚屋の前は子供や、その母親らしい人達がとり巻いて、今し金魚屋は  
桶の中の金魚を玉網で掬ひ上げて差し出して居ますが、子供の中には  
小さい容器持參で買ひに来て居るものもあります。のみならず縁日の  
人混み中には、既に金魚の入つた容器を下げて、いそ／＼歸るものも  
あり、如何にもよく縁日の金魚屋情調が描かれてゐます。

渡邊華山筆の『一掃百態』にも、路傍に荷を下して客を待つて居る

金魚賣りの爺が巧みに寫してあります。

馬琴の日記——最後にこれは全然別の話であります、曲亭馬琴の文政十一年十一月廿四日の日記に「庭之小池近々埋候 つもりに付、池中の魚釣之、東北風にて多くとれず、宗伯並に予も半日釣之、大金魚二つ六寸鯉小鯉各一つ、小鮒二三十也、宗伯終日風に吹れ候故、夜に入又前齒疼痛甚しく終夜不睡、お百看病至曉」とあります。馬琴は八犬傳その他で我々に親しみの多いだけ、この馬琴の庭の池に金魚が居たことが、なんでもないことながら、我々に興味を覚えさせます。

又或る洒落本に「天井をぎやまん張りにして、その上に金魚を泳が

せ、寝ながら眺めたら定めし涼しからう……」と云つた意味のものが  
ありますが、譬へ一種の空想にしても、金魚鑑賞の妙を極めたものと  
云へませう。往年外人が生きた金魚の額を作つて呉れと云つて、金魚  
屋を困らしたと云ふ話がありますが、これは前者と軌を一にするもの  
で、もし金魚屋が前の話を知つてゐたら、早速硝子で額を作つて、そ  
の中に金魚を入れ、註文主を満足させ得たと思ひます。

## 六 金魚の生物史

金魚の祖先——金魚の先祖は鮡であると云はれます。尤も詳しく云へば、これは恰度人間の先祖は猿であると云ふのと同様の批難があるかも知れませんが。要は鮡と同一の祖先から出發したもので、進化史上最も近い種類でありますから、その鮡に最も近い形の祖先から、今日の金魚は進歩したものと解せられるのであります。

乍然あの粗野な鮡に似た金魚が、今日の優麗な金魚に如何にして生れ變つたのであらう。もし假りに一步を進めて、かう訊かれたら、

果して的確に答へ得る人が幾人あるでござらませう。恐らく一人もあるまいと思ひます。

進化の理法——進化論の教ふる生物進化の理法には、今のところダーウキン氏の稱へた淘汰説、即ち漸進説とド・フリース氏の先年發表した突然變化説、即ち急進説があります。前者は生物は特有の遺傳性に依つて周圍に順應するものである。子の身體に現はれて來る形質で、遺傳性を有するものは傳はつて來るから、それが世代を距つるに従つて、先祖とは大變違つたものとなり得るものであると云ふ説で、もし人間がある目的を抱いてこの變化性を利用したら、目的が達せられるものであると説いてゐます。後者はこれに反し、生物は外圍の變化に

は關係なく時々急に變るもので、斯様な變化が新種を生ずるものであるとかう説のです。

私はこの兩説には何れも理由があると思ひます。夫れは元來鮎や鯉等鯉科の魚には、色彩の急變する先天的の特性があるもので、鮎鮎、鯉鮎などその例であります。金魚はこの鮎鮎のやうなものを人為的に變化させて生じたものゝやうに考へるのです。而もこの想像には十分許せる理由があります。

住所の廣狭による變化——一體生物は四圍の境遇で色々にかはるもので、第一棲む場所の廣狭によつても變化の起るものです。それで必然に小さい容器に容れて育てられるものは、天然の川や池に居るものと

違つて來なければなりません。それに育てられれば生活の心配が尠なくなり、食物を探す面倒もなければ、害敵の來襲に備ふる勞苦も要らない譯ですから、野生のものに比ぶれば、恰度野育の子供と、乳母日傘のお坊ちやんの相違です。

斯様にして金魚の先祖は人に飼はれて居る間に、次第に元來の粗野な性質を失つて、豊満なやさしい魚になつた。人は益々愛撫して、その特性の助長に努めた。勿論其の間幾世代、數百年の時が過ぎたでありませう。かくて今日見る豊麗優美を極めたる金魚が出来たのであるまいかと思ふのです。

金魚の尾——又金魚の三つ尾、四つ尾の起原に就いては、かう云ふ説



があります。魚の卵は發育中の或る時期に、その卵を震盪すると、頭の二つあるものや、尾の二つあるものが出来るものですが、金魚も多分最初はさうした原因から出来た不具の遺傳、及び人為淘汰の結果、今日見る様な珍らしい尾になつたのであらうと。

また今日の長い優美な尾は、外的には人為淘汰の結果であります。また内的にそれを助成した原因があると説く人もあります。即ち金魚は長い間小さい容器に飼育されて居たため、一體に弱々しくなつて、泳ぐ力も昔とは較べものにならない弱いものとなつたが、そこで今迄それに用ひられたエネルギーの幾分が過剰になつて、その結果尾の發達を促したと云ふのです。それに運動器官の性質が衰へると同時に、

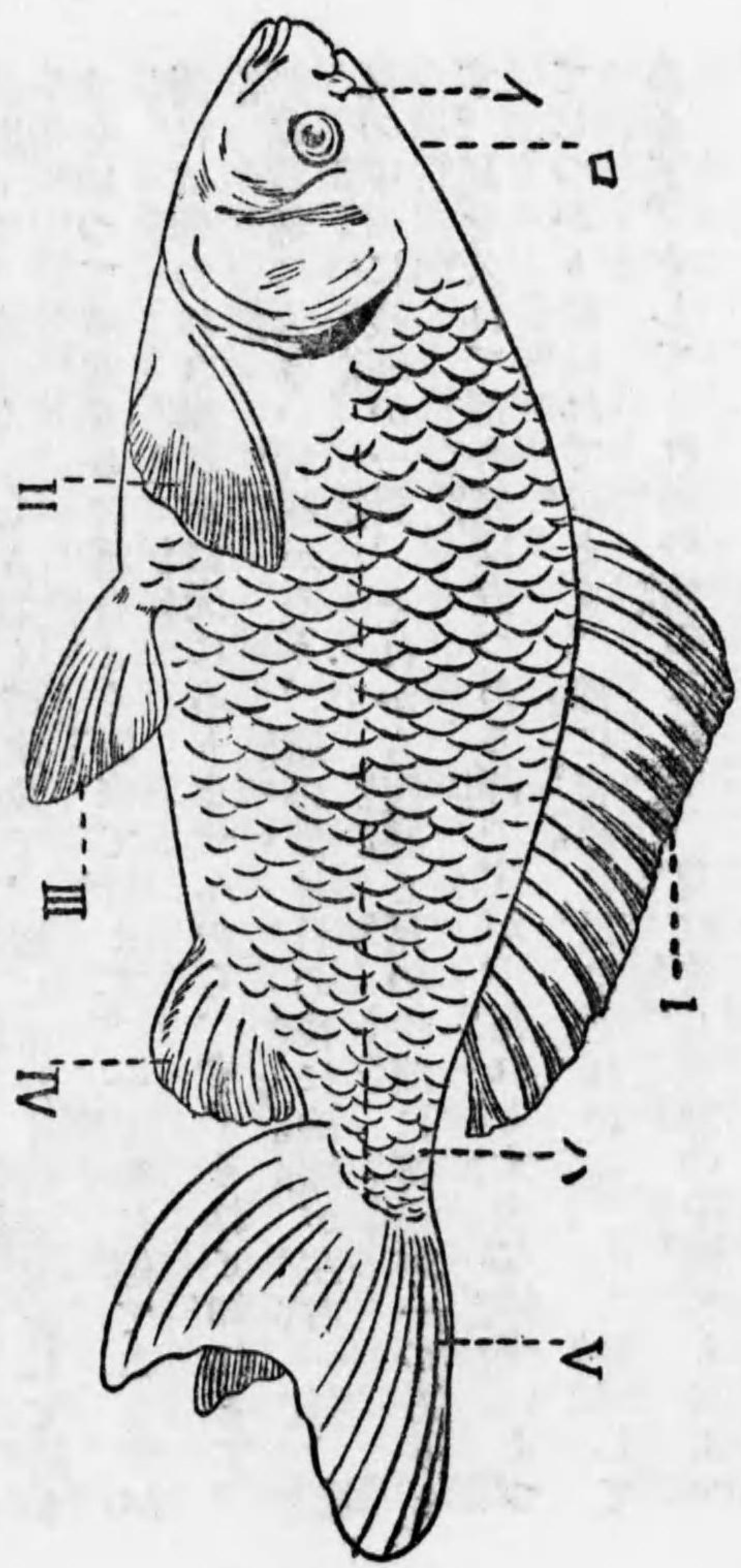
補助的呼吸器官と云ふ、全く性質の異なつた機能を營む様になつたから呼吸面を廣くするため、尾は次第に發達したのだとも云はれます。是非はともかく中々奇抜な説です。

變化の不思議——なほこの説に裏書するものは、生物の各部分の全く異つた機能を營むものが、不思議に關聯してゐることで、ある部分に故障があると、それとは全く無關係であるやうな部分にその影響が現はれたり、又は或る部分の變化と、色彩とがどうしても離されなないなどがそれです。曾つて秋山氏が琉金と出目金を組合せて、出目の色彩で眼の出ない琉金を作り出さうと試みたことがありますが、いくらやつても色彩が出目の黒や南瓜色なら眼が必らずとび出して來て、目的を

達し得なかつたなどはその好例です。これで見ても、身體の或る部分が變化すると、そこ丈けにとゞまらず、他の全く違つた部分にも變化が生ずることが知れます。

金魚の系圖——而して最も先祖に近い金魚は、一番普通種で鮎形に近い和金であることは辭めません。この和金はすべてが先祖の鮎に一番近い丈夫な種類ですから、飼養も従つて一番樂です。和金に次いで琉金、らんちうと云ふ順序で金魚の種類は出來て來たのでせう。そしてそれ等の既存種類の組合せに依つて色々の新しい種類が現はれて、今では十指に餘る程であります。それ等に就いては後章で説く事とします。

鮎の容姿——かく種類が澤山あつて、性質も體形もそれと違つて居ますから、金魚の一般習性形態を知るには先祖形の鮎によるのが一番近道です。鮎は人も知る如く淡水魚で、縦に平たく紡錘形をして居り水を切つて前進するに都合よく出來て居ます。一見鯉に似てゐますが鮎には鯉の如き觸鬚が口元にありませんから、すぐそれと知れます。鮎は背部に大きい背鰭があり、頭の裂け目の後に胸鰭が左右一對、腹部の中頃に腹鰭が一對、それから腹鰭と尾の中間に臀鰭が一つあります。尾を入れて都合鰭は五つある譯ですが、何れも丈夫な鰭條によつてしつかり装はれて居ます。殊に背鰭と尾はそれが著しく發達してゐます。そしてそれ等の鰭のなかで、尾は専ら運動の中樞とも云ふべ

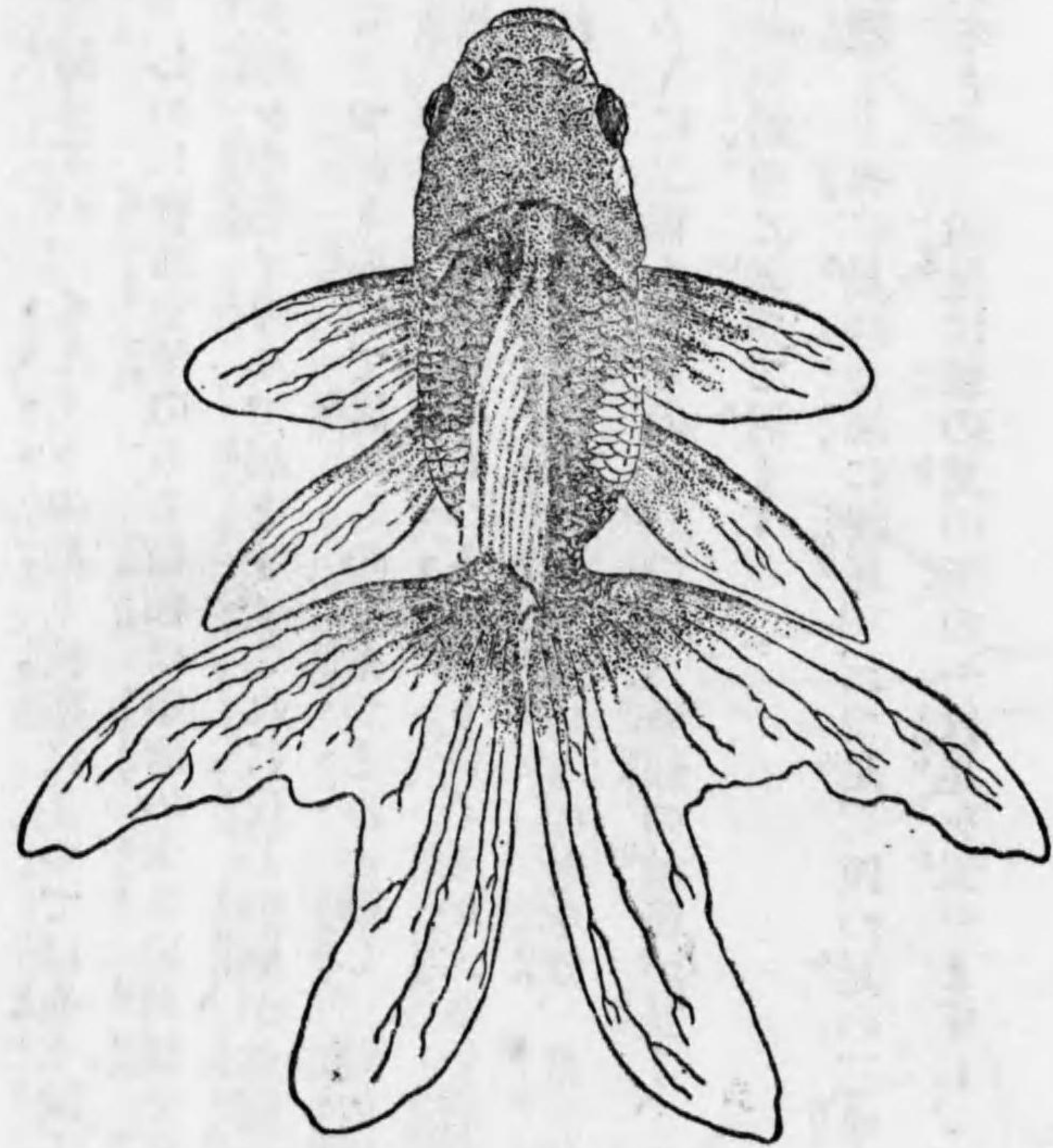


和名各體部の名稱  
 (I) 背尾 (II) 胸 鳃 (III) 腹 鳃 (IV) 臀 鳃 (V) 尾 鳃

く、前進運動の衝に當つて居り、胸鰭腹鰭の左右一對ある鰭は、突然運動を中止したり、浮沈する作用を司り、同時に體の權衡を保つて居ます。それから背鰭臀鰭は水を切ることに依つて前進運動を助け、且つ運動調節の機能があります。

鰻の習性——形態は大體その位にして、習性に移ると、鰻は二歳にして既に産卵します。時期は四月末から五六月の春も、開の頃で、主として雨あがりの穏やかな氣持、早朝、淺瀬へ出て藻や浮草に産卵します。食物は水中の小生物、介類の子供、藻に附着する微生物、硅藻等を主に食べて居ます。

金魚各部の名稱——さて金魚は身體各部にそれ／＼固有名詞がありま



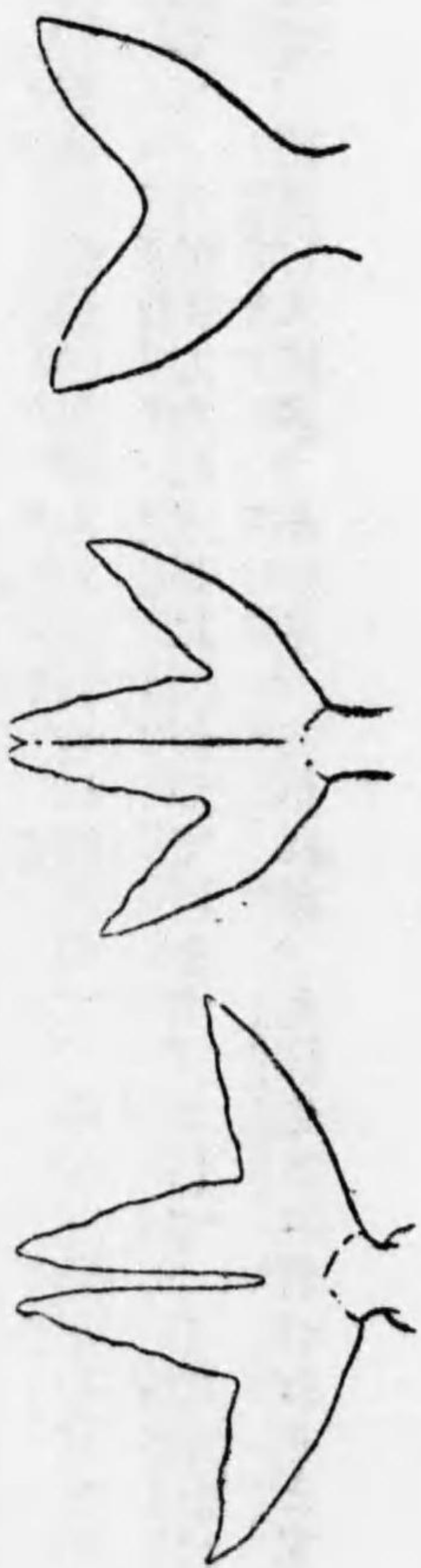
金琉たし達發に事見の鱗  
(りよ魚金の本日)

す。例へば口をすき口、胸鰭を向ゑら、腹鰭を土ずり、臀鰭を揖鰭、尾と體のつけ根を尾筒、若くは金筒と稱する類であります。その他頭の上を鼻筋と云ひ、鼻筋尾筒の形状は、金魚の良否に大關係があります。概して金鑄の尾筒はずんぐりと成るべく太い方がよろしく、鼻筋はよく通つて厚味のあるものがよしとされてゐます。

背鰭 — 金魚の鰭は各部の中で最もよく發達して居ます。殊に尾は體長の倍以上もあるものが稀らしくない位で、餘りに極端に發達した結果は、運動器官どころか、却つて金魚自身にも荷厄介の觀があります。この尾と背鰭は、金魚によつて形状がまち／＼で、金魚の種類、良否を定むる重要な要素となつて居ます。さて背鰭は一般によく發達

して居ますが、らんちうの如く種類によつては全く缺くものもありま  
す。しかし普通背鰭のある種類は中庸の大きさの背鰭を可として、かゝ  
る背鰭を半巻と呼んで居ます。これに反し背鰭が大部分消失して、ご  
くちよつびり残つて居るものを糸つまみと稱し、關西地方には珍重す  
る所もあります。この糸つまみよりいくらか大きい背鰭を中つまみ、  
それより一層大きく半巻の半分位のもを半鰭、又背鰭が中斷して離  
れぐに二個あるものを二つ鰭、背鰭の前後が長く、半巻より大きい  
ものを鮒背と云つて居ます。

尾鰭——次に尾は普通に鮒尾、三つ尾、四つ尾の三通りに分つことが  
出來ます。鮒尾は鮒の尾の形一枚尾を云ひますし、三つ尾は普通の



鮒三の尾の魚金

(尾鰭・尾三・尾四らが右)

金魚の尾の上縁の融着したもの、又四つ尾はその上縁に切れ込みがあ  
つて、左右に別れて居るものを云ひます。しかし同じ四つ尾でも、左  
右へひらきの少ないものと、多いものまで良否が區別され、一般に左  
右にひらいたもの程いとされて居ます。又三つ尾、四つ尾はその  
形状によつて、それ々々色々の名稱があります。一二の例を擧げて見

ますと、三つ尾の上縁の特に長いものを郭公の尾に似てゐる處から郭公三つ尾、矢筈に似た尾を矢尾と云ふ等その例であります。其他揖尾、房尾、海老尾、箱尾、鬘斗尾、兩ばね、片ばね、大開、中開、前揃、指尾、獅子尾、一文字尾、十文字尾、袋尾、平尾、中丸尾、劔先、かぶり等色々ありますが、何れもその形状に依つて、任意に命名したものです。尤もこれは和金、琉金等のふくよかな尾に限られて、ちゃんまりした尾を賞美する金鑄には適用されません。のみならず金鑄の尾は、普通の金魚の尾が左右に斜めに擴がつて、やゝ三角形をなすのと違つて、比較的左右に水平に擴がつて居ます。そして、その形状に従つて、櫻尾、大津多、小津多、丸われ尾、丸劔先等の名があります。

色彩——金魚の色彩は誰も知る如く、赤、白、もしくはその斑であります。近來はもつと複雑な色彩を帯ぶものが現はれて來ました。又稀には黒色で終始するものもあります。變色——けれども金魚は鯉のやうに孵化した當時から美しい色をして居るものではありません。どんな美しい色の金魚でも、孵化した當時は鯛と同じ黒味勝の鐵色をして居ます。それが六七月頃、孵化して五六十日も経過しますとその黒味勝の鉛色の下から、ぼんやり白ちやけたはげが現はれて、ごく／＼徐々ではありますが、その白ちやけたはげが段々鮮明して來て、遂には一方純白となり、白ちやけた色に赤味を含んだ部分は赤色となります。しかし一概に赤白と云つても、その

色彩の程度は區々であります。又和金の赤と金鑄の赤とは同じ赤色でも、大變相違して居るものです。で東京觀魚會の定むるところに従つて、大體區別すると次の様になります。

赤の部 金色、丹色、紅、狸々。

白の部 純白のものを特に銀色と云ひます。大體は黄色を加

味するものであります。

更紗の部 赤白交る斑を更紗と云ひます。更紗、多赤更紗、多

白更紗、腰白、脊赤。

頭模様の部 面被り、白面、白頂、白頂、兩奴、口紅。

黒の部 鐵色、虎の部 斑黒。

## 七 金魚の種類

### 一、和金

單に金魚と呼ばれる一番普通の、又一番先祖に近い金魚です。體はすらりとして居て長く、鰭や尾も餘り發達して居ません。何處かまだなまな、昔の野生的の面影があつて、眞の愛錦家には喜ばれません。が、野生に近いだけ頑健で、抵抗力強く、飼養容易でありますから、従つて値も安く、縁日の金魚屋で一匹二三錢で買つてゐる金魚はこの

和金です。……と云ふと如何にもいやな金魚の様に聞えますが、それは比較的話で、池に飼つた太つた元氣のいゝ和金は、鮮麗な色彩が如何にも生々として見事なものです。その性頑健なために生長は早く金魚中一等大きくなつて、六七寸のものはさらにあります。そして時には一尺五寸以上に及ぶものも敢て稀らしくありません。尾は發達してないと云つても、四つ尾三つ尾が普通で、只琉金のやうに房々した尾がない丈けです。色彩も他に比して決して遜色がなく、模様も如何によつては中々侮れないものがあります。

## 二、琉 金

和金同様古くから愛玩される普通の種類であります。體は丸く、尾は長く、和金に比して遙に優艶で、一名長崎又は長尾とも云ひます。恰度美しく彩色した繭に、ふうわりとベールを垂らしたやうな、長い尾をした金魚がこの琉金であります。尾の長いになると、體長の一倍半もあります。その長い大きい尾が、水中にゆるやかに擴がつて居る様は、中々の壯觀であります。色彩は和金と大同小異で、しかも一層美しく、殊に長い尾や鰭がふくよかに擴がつて居て、一段と綺麗に見えます。尤も琉金は和金より遙に小さく、長い尾を合せて七八寸を出るものは餘りありません。が性質は見かけ以上に強健で、飼育も容易、のみならずそのふくよかな容姿と鮮麗な色彩は、最も理想に近い



金魚と云ふことが出来ませう。そして昔はこの琉金も身體がすつと細長かつたものでありますが、近來次第に身體がまんまるくつまつて、そして尾が房々と美しくなつて來ました。

琉金の名は又その歴史を語るものとして意義があります。即ち琉金は琉球の金魚と云ふ意味で、かの徳川初期に琉球王が島津家に贈り、島津家から徳川幕府に献上したと云ふ金魚は、この琉金だつたやうであります。長崎の名稱も又同じ解釋が下せます。そして一方又薩摩の琉球芋が他では薩摩芋の名で呼ばれる如く、琉金と長崎と全く別途に出てる様で、實は存外密接な間柄なのかも知れません。

### 三、金鑄(蘭鑄)

これも普通に知られて居る金魚であります。又の名を朝鮮もしくは丸子と云ひます。脊鰭を全く缺くのと、腹が今にもはちきれ相にふくれて居るので、容易に他と區別が出來ます。今年生れの小さいらんちうが泳いでゐる様は蠶豆に尾をつけたらこんなでもあらうかと思はれる誠に可愛ゆい恰好をしてゐます。尾は琉金の様に長くなく、また彼の様にふうはりともして居ません。其他胸鰭も腹鰭も皆ちんまりして居ます。ために琉金の様な華やかさはありませんが、この金魚の生命は如何にも可憐な趣きのある處にあつて、尾や鰭の餘り大きくない

方が却つて喜ばれます。色彩も和金、琉金程鮮美ではありません。けれど金鑄の赤色は金色に近く、殊に背部は金色燦爛たる光輝を放つてゐて、中々滋味のある色彩美に富んでゐます。

金鑄の最も著しい特色は、一定の時期が來ると俗に云ふ頭の出ることで、頭部殆んど全體に肉瘤が出來ます。所謂獅子頭らんちうがそれで、恰度獅子のお面を被つた様ですから獅子頭の名があるのです。また一見頗るブルドックの顔に似ますから、外人はこれをブルドックとも呼んで居ます。そしてその澤山出來たもの程珍重されますが、尤もこれは東京地方に限つて、關西のらんちうには普通この獅子頭がありません。

金鑄は性や、虚弱で、飼育も前二者に比べるといさゝか面倒であります。泉水に飼つて相當に注意さへしますれば決して死ぬものでもありません。

前にも云ふ如く、琉金は色彩容姿共に華やかで、素人好のするのに對し、この金鑄は玄人に喜ばれます。その濫い色彩美、及び一種形容の辭のない雅びた容姿が事のほか玄人間に喜ばれるのであります。一番何百圓と云ふ高價を稱へられるのもこの金魚であります。従つて金魚愛玩家には、この金鑄を専門に飼養する人が澤山あつて、飼養法もよく研究され、魚の良否識別の標準も完備してゐます。その大略を観魚會の定むる處によつて誌しますと、頭はなるべく口先より頬尻ま

での間長くして、厚味あるものがよろしい。脊部は幅廣く、頭の付根より弓形に漸々に上り、中央より又漸々に下つて其間尾筒より長いものがよいとされます。又尾筒はなるべく太く、脊の形に従ひ、程よく尾のつけ根まで漸々に下り、その丈け脊より短いものがよいのです。尾は柔らかにして尾心曲らず、上らず、下らず、泳ぐ時は閉み、止る時は直に圓の四分の一位に開くものをよしとします。それから腹部は左右同様に張出したものがよく、楯鱗は尾の下蔭にかくれて外に現はれないものがよろしい。

金鑄の語源はオランダの金魚から來てゐて、オランダ人が始めて舶載したから起つた名稱とも考へられますが、併し恰度今日、舶來と云

ふ言葉が使はれるやうな意味から——即ち珍らしい金魚と云ふ程の意味から、金鑄と名付けられたと考へる方が、或は實際に近いかも知れません。十分生長した金鑄は五寸以上に及びます。

#### 四、オランダ獅子頭

琉金と金鑄との間に出來た金魚であります。體は金鑄に似てまん丸く、頭には瘤がありますが、鰭や尾は琉金をつくりで、薄いベールの様によく發達して居ます。色彩もごちらかど云ふと琉金に近いもので、もどこの種は故意か偶然か、今より七十餘年前の天保年間に、大和の郡山附近に初めて見出された種類であります。金鑄と琉金との間を行

つて、お互の特色を兼備した様な金魚でありますから、時好に投じた事は勿論であります。前三者程に廣く一般には行き亘つてゐません。又この金魚に斑の出来たのは最近二三十年以來の事です。十分生長すると尾を入れて一尺に餘るものもあつて、金魚の中でも大きいもの、一つに數へられますが、最初この金魚の出来た時分は、漸く二三寸に達するのが關の山だつた相であります。

### 五、出目金

眼が恰も蛙の眼玉のやうに、兩側に恐ろしくとび出して居る處からこの名があります。今日では最も普通に見かける種類の一つであります。

が、日本に來たのは、まだ左程古い事ではなく、日清戦後初めて支那から輸入されたものです。それで一名支那金の稱があります。形も以前から見ますと餘程變つて、即ち出目の特色が一層著しくなつた上に、鰭や尾も始めは金鑄の様に小さかつたのが、琉金の様になり、恰度田舎娘が都會の空氣に染つた位の進歩はあります。

出目金の特色は云ふ迄もなく眼玉の飛び出したことではありますが、その飛び出し方や程度には色々あつて一定しません。また生れつき眼玉が飛び出して居るのではなく、生長するに従つて、段々と飛び出して來るもので、従つて年齢によつてもいくらか相違があります。色彩は一體に濁つて、黒色もしくは小さい黒色斑點のある褪めた帶黄赤色

所謂南瓜色が出目金の五分を占めて居ます。なほこの金魚の變つた點は、普通の金魚のやうに一緒に集つて遊ぶのを好まず、孤獨を愛し、各自放れ離れに遊んで居る事です。

#### 六、出目らんちう

出目金と金鑄との混血兒であります。元産地は支那で、我國へは明治三十四五年頃、初めて來たのです。この出目金鑄は出目金の眼玉の飛び出し方が、更に甚だしく、殆んど四十五度の角度に空に向つて飛び出して居ます。體形はらんちうに似て丸く、脊鰭を缺いて居ます。しかし他の鰭や尾はよく發達し、特に尾は體長より長い場合も尠くあ

りません。色彩は略出目金同様であります。金鑄よりも虚弱で、泳ぐ力にも乏しく、平生は大抵容器や池の底に腹をつけて一人しよんぼりして居るものです。さう云ふ姿は餘りに淋しく、人間の淘汰の深刻さを思はせて、却つて空恐ろしい氣がします。

#### 七、和唐内

和金と琉金との混血兒で、東京にこの種の初めて公に現はれたのは、明治十六年開催の魚類展覽會の折りでありますが、恐らくたゞそれまで人の注意を引かなかつたと云ふまで、餘程以前からあつたものでありませう。體形は和金に似てやゝ丸味を帯び、鰭や尾は琉金に

似て可なり發達し、色彩も鮮麗であります。一口に云へば和唐内は和金から強壯な性質を稟け、琉金から華奢な鰭や尾と美しい色彩を稟けついで金魚であります。

### 八、秋 錦

金鑄とオランダ獅子頭との間に出来た金魚に、故水産講習所長松原先生が秋の錦繡、即ちあの眼も覺めるやうに美しい秋の紅葉を連想して名けたゆかしい名前であります。この金魚は明治二十八年頃、東京及び大阪の兩地に、期せずして同時に現はれたもので、體は金鑄に似てまろく、頭部には瘤があります。又鰭や尾はよく發達し、殊に尾は

華奢でしなやかで、體長以上に及ぶものも尠くありませんが、脊鰭は金鑄に似て全くありません。しかし金鑄とオランダ獅子頭の間に出来た仔魚には、九分迄脊鰭がありますから、その中から秋錦を選び出すのは却々容易でないのです。金鑄よりも幾分強健で、泳ぐ力も勝つて居り、十分成長すると尾を入れて一尺以上に及びます。

### 九、朱文 錦

和金、出目金、及び鮒を交互に交配して出来た金魚であります。體形はむしろ鮒に近く、尾は普通の魚の如く二つ尾であります。尤も尾の長さは體長の五分の三か三分の二にもなつて、中央は深く切れ込ん

で居ます。この種の特色は、その色彩で、朱文錦の名も實は故松原先生がその色に因んで命名したのであります。即ち地色は出目金と同様に鮮明を缺き、普通白、紫青或は鈍黄朱色で、それに黒色その他の斑紋が散在してゐます。明治三十二年頃、始めて創出された新しい種類であります。今ではごく普通に見掛ける迄に普遍化し、金魚中でも一番丈夫な種類です。なほこれと同じもので出目のものがありますが、これを出目朱文錦と云つてゐます。

## 十、金蘭子

和金と金鑄との間に出来た金魚で、出来てからまだ廿年位にしか

りません。體形は和金に近く、和金に脊鰭のないものと云つた方が一層適切かも知れませんが、尾は小さいながら三つ尾四つ尾であります。色彩は何處か重く濁つた中に、鮮やかな處のほの見える濛い色をしてゐます。金蘭子の名は金欄の様な深味のある美しい色彩をしてゐる金魚と云ふ意味で、これも故松原先生の命名にかゝります。普通黒、赤、白及びそれらの混つた色が主色となつて居ます。

## 十一、鐵尾長

鐵色をして居て、一生變化しないのが金魚には珍らしいと云ふので珍重されるのであります。一體金魚は白、赤或はそれ等の斑に變色す

るもので、假令その年は變色しなくとも、翌年或はその翌々年には大體變色するものであります。處がこの金魚ばかりは變色しません。尤もこれはこの金魚のすべてではなく、この金魚もどかく變色したがるもので、三四歳になると所謂南瓜色になるものが澤山あります。以前から關西地方、殊に名古屋附近で飼育されて居た金魚で、東京では近年名古屋附近の彌富から金魚が送られるやうになつてからポツ／＼見かけます。琉金の一變種で、體形はほと琉金そのまゝと云つてよろしい。

### 一一三、孔雀尾

これも名古屋附近では以前から飼育して居た種類であります。體形は和金に似て、恐らく和金の變種でありませう。特徴は尾が孔雀の尾の様にきつぱり、左右に擴がつて居る點で、尾の大きさは和金程しかありませんが、中央脊の部分がえぐられた様になつて左右に開いて居ます。色彩は和金と殆んど變りがありません。

### 一一三、キヤリ

琉金と出目金の混血兒でありますが、體形は琉金に近く、眼も出て居ませんし色彩も豊麗、琉金同様の美しい色をして居ります。鰭や尾もよく發達してゐます。只琉金と違ふのは鱗で、これは出目金に似て



鱗がありません。尤も本當に鱗がないのではなく、出目金の鱗は透明なでない様に見えるのですが、その點だけ出目の特徴を受け續いで居り、更に朱文錦に見る様な斑點が處々にあるのも琉金と違ふ點です。明治期の末頃に出來た、ごく新しい種類であります。しかし非常に丈夫な種類で、外國への輸送にも一番耐久力があつて喜ばれ、新しい割合に今日ではごく普通の金魚になつてゐます。又キヤリコの名は外人が更紗のやうな金魚と云ふ意味からキヤリコキヤリコと呼んでゐたのが何時か名前となつたのです。

#### 一四、出目秋錦

出目金と秋錦との間に出來た金魚で、秋錦の眼玉のとび出した金魚と思へばまづ間違ひはありません。出來てからかれこれ廿年になりました。非常に優麗な種類であるのは秋錦を見れば容易に想像されませう。

#### 一五、琉金獅子頭

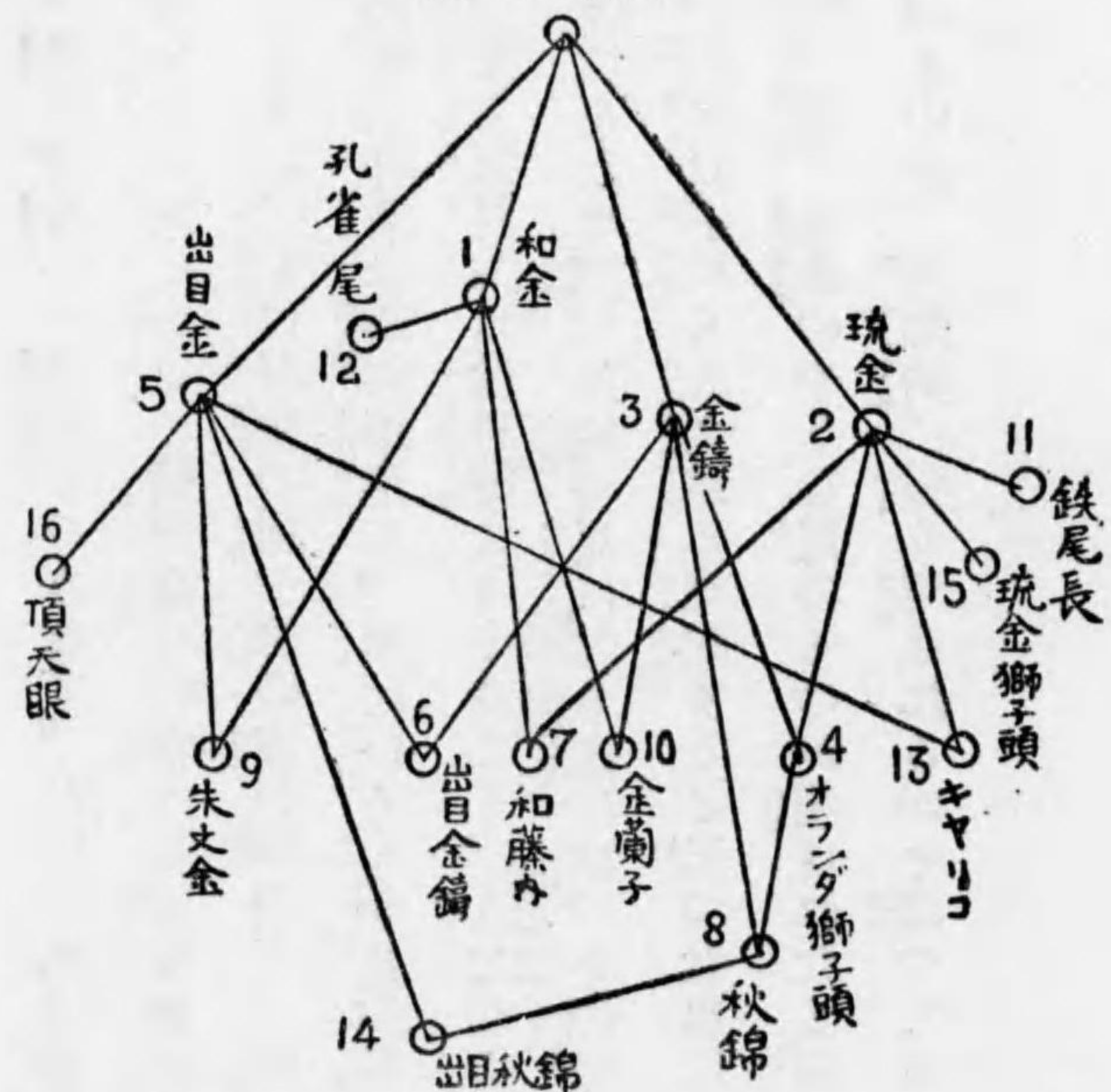
獅子頭のある琉金で、これは琉金からごく稀に現はれます。

#### 一六、頂天眼

支那産の金魚で、支那では朝天眼と云つて居ます。出目金より、又

圖系魚金の種六十  
(る據に號番の文本は字數)

先祖の魚金



物で、その後水  
害などのため、  
今日では全くそ  
の影を潜めた種  
類もあるからで  
す。尤もその中  
にはキヤリコ、  
朱文金の如く、  
今日では在來の  
金魚と殆んど選

出目金鑄より出目の程度が更に甚しく、出目の眼が上方を向いてつき出てゐます。支那には以前からあつて、屢々日本へ輸入されたのですが、その都度失敗に終つて、最近漸く日本でも見られるやうになつた金魚です。性質その他は、殆んど出目金鑄と變りありません。

總 說

以上で大體今日及び過去に存在した種類は盡きてゐて、これを系統的に圖示すると挿圖のやうな組合せになります。過去と云ふのは右の  
中で出現の年代の新しいものは、秋山氏が松原先生、戸山、石川二博士の指導の下に、種々遺傳學の研究をこの金魚で行つてゐた時分の産

ばない迄に普及した種類もあります。なほこれは餘談であります。その時分秋山氏は金魚と鮒や鯉の色々な交配を試みて、試験したのであります。常に野生の鮒や鯉の方が勝つて、例へば金魚と鮒の間に出來た仔魚は全部鮒形で、單にいくら尾が長いかと思ふ位の程度で、尤も氣持ちは餘程鮒よりやさしく、人なつこくもあつた相であります。そして三つ尾四つ尾になる迄には、その仔魚を再び金魚と交配し、出來た子供も又金魚と交配すると云つた風に、三四回も世代を重ねて、漸く金魚のやうな尾のものが現はれたと云ふことで、如何に劣性のものが、遺傳的に強く現はれるかを語つてゐたこの事でありま

## 後篇——金魚の飼ひ方

## 八 金魚の容器

金魚の容器は、適當の容器のない場合には、水の入るものなら何でも間に合せると云ふ風ですから、種々あるのでありますが、まさか鹽やバケツを容器とも云へませんから、茲には普通の容器に就いて、その長短と大體の注意を誌すにとどめます。

小容器と大容器——金魚の容器を大別して、自由に持運びの出来るものと、一定の場所に置くものとの二種に別つことが出来ます。前者は一般に小形の容器で、體裁はよいが金魚の衛生上には不向なもので、

只部屋とか、机<sup>きうじやう</sup>上、床間<sup>とこのまあるひ</sup>或は軒端<sup>のきばた</sup>等に置いて、眼<sup>め</sup>を娛<sup>たの</sup>しましたり、裝飾<sup>しよく</sup>にする場合<sup>はあひ</sup>の容器<sup>ようき</sup>です。即<sup>すなは</sup>ちかりに容<sup>い</sup>れて置<sup>お</sup>く臨時<sup>りんじ</sup>の容器<sup>ようき</sup>で、原則<sup>げんそく</sup>としては決<sup>けつ</sup>してその中<sup>なか</sup>へ長<sup>なが</sup>く容<sup>い</sup>れて置<sup>お</sup>いたり、その容器<sup>ようき</sup>で金魚<sup>きんぎよ</sup>を飼<sup>しやう</sup>養<sup>やう</sup>すべきものではありません。これに反<sup>はん</sup>し後<sup>こう</sup>者は専<sup>ちゆう</sup>ら金魚<sup>きんぎよ</sup>の飼<sup>しやう</sup>養<sup>やう</sup>を目的<sup>もくてき</sup>とする容器<sup>ようき</sup>であります。併<sup>しか</sup>し一般<sup>はんか</sup>家庭<sup>かてい</sup>では、さう／＼金魚<sup>きんぎよ</sup>のため十分<sup>ぶんぶん</sup>の容器<sup>ようき</sup>を用意<sup>ようい</sup>する譯<sup>わけ</sup>にもまゐりません。出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>るだけ後<sup>のち</sup>に説<sup>と</sup>く飼<sup>し</sup>養<sup>やう</sup>法<sup>はふ</sup>に注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>して、容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>の不<sup>ふ</sup>向<sup>ひき</sup>を補<sup>おぎな</sup>はれたいものです。

### 一 小 容 器

三條件<sup>でうけん</sup>——小容器<sup>せうようき</sup>は前<sup>まへ</sup>にも云<sup>い</sup>ふ通り、金魚<sup>きんぎよ</sup>の一時<sup>いちじ</sup>の容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>で、觀<sup>くわん</sup>賞<sup>しやう</sup>が

目的<sup>もくてき</sup>です。從<sup>したが</sup>つて小容器<sup>せうようき</sup>は裝飾<sup>さうじよく</sup>と云<sup>い</sup>ふ觀<sup>くわん</sup>念<sup>ねん</sup>を無<sup>む</sup>にしては殆<sup>ほと</sup>んど無<sup>む</sup>價<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>になります。故<sup>ゆゑ</sup>に小容器<sup>せうようき</sup>を選<sup>えら</sup>ぶ際<sup>さい</sup>には、是<sup>ぜ</sup>非<sup>ひ</sup>容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>それ自<sup>じ</sup>體<sup>たい</sup>が美<sup>び</sup>的<sup>てき</sup>であり、部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>ともよく調<sup>てう</sup>和<sup>わ</sup>し、且<sup>か</sup>つ金魚<sup>きんぎよ</sup>の美<sup>び</sup>を増<sup>ま</sup>すもの、——と云<sup>い</sup>ふ三<sup>さん</sup>點<sup>てん</sup>に留<sup>りゆう</sup>意<sup>い</sup>されたいものです。そしてこの三<sup>でう</sup>條<sup>けん</sup>件<sup>けん</sup>に合<sup>あ</sup>格<sup>かく</sup>し、而<sup>しか</sup>も金魚<sup>きんぎよ</sup>の衛<sup>ゑい</sup>生<sup>せい</sup>にもよろしい容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>が、最<sup>も</sup>も理<sup>り</sup>想的<sup>さうてき</sup>の小<sup>せう</sup>容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>と云<sup>い</sup>へませう。

玻<sup>はり</sup>璃<sup>り</sup>器<sup>き</sup>——それはともかく、今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>最<sup>も</sup>も普<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>に使用<sup>しやう</sup>される小<sup>せう</sup>容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>は、云<sup>い</sup>ふ迄<sup>まで</sup>もなく玻<sup>はり</sup>璃<sup>り</sup>器<sup>き</sup>であります。これは透<sup>とう</sup>明<sup>めい</sup>で、中<sup>なか</sup>の金<sup>きん</sup>魚<sup>ぎよ</sup>が透<sup>す</sup>けて見<sup>み</sup>えて、如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にも涼<sup>すず</sup>しげですから、夏<sup>か</sup>期<sup>き</sup>の裝<sup>さう</sup>飾<sup>じよく</sup>用<sup>よう</sup>として最<sup>も</sup>も理<sup>り</sup>想的<sup>さうてき</sup>です。故<sup>ゆゑ</sup>に贅<sup>ぜい</sup>澤<sup>たく</sup>を云<sup>い</sup>へば玻<sup>はり</sup>璃<sup>り</sup>器<sup>き</sup>には日<sup>にち</sup>中<sup>ちゆう</sup>だけ入<sup>い</sup>れて鑑<sup>かん</sup>賞<sup>しやう</sup>眼<sup>がん</sup>を娛<sup>たの</sup>しませ、夕<sup>ゆふ</sup>方<sup>がた</sup>暑<sup>じよ</sup>氣<sup>き</sup>の去<sup>さ</sup>ると共<sup>とも</sup>に、他<sup>た</sup>の適<sup>てき</sup>當<sup>たう</sup>な容<sup>よう</sup>器<sup>き</sup>へ還<sup>かへ</sup>すやうにしたいものです。か

くすれば常に潑瀾豊麗の金魚を娛しむことが出来、かの死さうな色艶の悪い入れ置きのままの金魚とは隔世の相違で、これだけ氣持がよく涼味を掬する事が出来るか知れませんが。しかし他に容器のない場合には、成るべく度々水換をして、夜は暗い場所に安置します。そして食物はごく控へ目に、生餌（あかこ、子等）を少しづつ與へる位にとごめます。尤もこれは他の小容器も同様です。

次に一概に玻璃器と云つても色々あります。最も古くからある圓形楕圓の小玻璃器は十二番、六番、四番、二番とあつて、十二番は直徑三寸、六番は直徑四寸五分、四番は五寸五分位、二番が七寸位あります。今でも金魚屋には澤山ある器で、これは餘程前からあつたものらしく

和蘭傳來のぎやまんからその源を發してゐるのでせう。次に出來たのが硝子のズン筒です。これは最近非常に用ひられて來て、形にも又縁の色や裝飾にも色々のもので出來るやうになりました。丈も随分深いものがありますが、硝子は光線が底まで透入しますから、これはどんなに深くとも差支へありません。更に近頃ではこのズン筒が一層進歩して屋形とか、春日燈籠形など、云つた、美しい形のもので出來、床の裝飾に用ひても決して恥しくない落付のあるものとなりました。そしてその大形のものには餘程大容器の方に、總べての條件が接近して居ます。

陶器——玻璃器の他の小容器としては、普通に金物と瀬戸物とがあり

ます。その中で後者の内面の白いものは、金魚の色艶を一層美しく見  
せますから、一時の慰みに入れて置くにはなかく雅致があつてよい  
容器です。

**金魚器**——これは金魚の容器として最も不向ですから、成るべく用ひ  
ないことです。それは金物類はすべて酸化作用によつて一種の有害物、  
俗に云ふ金氣を發生しますから、かゝる容器へ入れて置くと、金魚は  
金氣のため竟に斃死するに至るからです。尤も瀬戸びきの金氣を發生  
せぬものは、この限りではありません。白い瀬戸びきの洗面器等に入れ  
ると、却つて金魚は大變美しく目立つものです。

**部屋へ飾る注意**——装飾用として小容器に金魚を入れて部屋に飾る場

合、兎角水が汚れ易いものですから、水の汚れぬ工夫を心得て置く事  
も大切です。第一に餌料は水を汚す惧れがありますから、一切與へず  
に置いて、水の透明清冽を期したいものです。而もまだ金魚は糞で水  
を汚す惧れがありますから、糞をさせない工夫も肝要で、それには前  
々日から一切餌を與へず、金魚の腹を空にして置く事です。かくて家  
族の誕生日とか、その他何か特別の催しのあつた場合の飾りものによ  
ひるのです。なほかゝる場合金魚は非常に空腹を感じてゐますから、  
催しが終つたら、早速元の容器へ返し、消化のいゝ食物を徐々に與へ  
て行きます。又この場合容器の底に小石でも入れて置くと、金魚が美  
しく目立つ許りでなく、例へ糞をしても石の間に挾つて目立たなくな

ります。

## 二 大 容 器

これは金魚の眞の容器とも云ふべきもので、まづ泉水がその代表的なものです。その他多數飼養する人、田舎の愛錦家又は金魚屋では泥池を用ひます。又一種金魚瓶と云ふ底の浅い瓶も、この種の容器と見ることが出来ませう。

## 金 魚 が め

金魚瓶は直徑二尺から三尺位、深さ一尺乃至一尺五寸位の碗形の粗

末な焼物の瓶です。泉水を作るより遙に輕便であり、且つ持ち運びも出来ますから便利です。飼養に就いての注意は、泉水と別に變つた事はありません。又支那鉢も同様の目的に使はれます。

## 泉 水

種類——泉水は金魚の最も理想的の容器です。しかし一概に泉水と云つても、種類はまち／＼で、形状も一様ではありません。そこでまづ泉水を材料から分けますと、コンクリート製、漆喰製の塗泉水と、木槽があります。中でコンクリート製泉水はセメントが普及した今日では、最も廣く用ひられて居ます。次に形状から云ひますと、人々の好



みで造らるゝのですから様々で、中には突飛な形のものもあります  
が、大體圓形に近いもの、四角形のもの、瓢形のもの及び不正形の四  
に別られます。又中には美觀を添へるため、泉水に島を築き、石や岩  
を配置して、樹木を植ゑたり、様々の工夫を凝す人もあります。見た  
眼は變化があつてよろしいが、しかし金魚飼養の見地から云ふとこれ  
等は總べて有害無益のものです。尤も論者に依りますと不正形のもの  
とか、瓢形のもの、中に島のある泉水等は、變化があつて金魚のため  
にいゝやうに云ひますが、實際はさうではなさそうで、何故かと云ふ  
と、かゝるでこぼこした泉水は、第一金魚に悪いくせをつけますし、  
不知不識の間に體を傷つけ、容姿を損する事があり、その上水換掃除

その他の管理に甚だ不便だからであります。  
理想的の泉水——最も理想的の泉水は、長方形、若しくは正方形で、  
平坦な底は緩く一方に傾斜し、その端に水を排出する穴か、もしくは  
碗形の大皿の塗り込んである泉水です。そして岩石、木根などの置物  
は全く置かないものがよろしい。  
泉水の大きさ——大きさはまづ幅四尺縦六尺、即ち疊約一疊敷位のもの  
が一番手頃であります。あまり広いと管理に不便でありますから、もし  
三坪なり五坪なりの大きい泉水をつくる場合は、成るべく疊一疊敷大  
せいぐ一坪位のものも幾個もつくる様にしたいものです。但し庭園  
につくる泉水は、周囲の景致上、さうぐ理屈許りも云つて居られま

せんから、これはむしろ泥池に準じて造くられたがよろしい。

泉水の深さ——泉水の深さは出来るだけ浅い方がよろしく、大きい泉水でも一尺を越さない方がよい位です。そして水深は二三寸、深くも五六寸あれば結構です。餘り水が深いと光線が十分透入しませぬから底の方にぬら／＼した汚れた水が停滞して、ために底の方は水温が低下し、金魚の發育上に大層悪影響を及ぼす場合があります。尤も泉水が餘り浅いと害敵に襲はれる憂ひがありますし、又冬の結氷も心配であります、嚴寒は嚴重な冬圍さへして置けば、譬へ氷がはつても被害はまづ無いと云つてよろしい。そして嚴寒地で、厚い氷のはるやうな土地なら、冬期だけ別の瓶なり桶なり、底の深いものに移して

比較的暖かい場所に、十分防寒の手當をして置きます。

泉水の位置——次に泉水を作る場所は、元來泉水はさう／＼動かす性質のものでありませんから、最初にその位置を十分考慮しなければなりません。で、泉水の理想的位置を申しますと、夏涼しく、冬暖かな場所で、強風の餘り當らぬ所がよろしく。無論實際に當つては、庭園の配置、家の方角、空地の所在地等に支配されますが、出来るだけ理想に近いものを造ることです。そこで一層具體的に泉水の理想的位置を言ひますと、まづ第一に東南の方角が開いて、陽の當りがよろしく土地高燥で風通しもよく、且つ西北にや／＼距つて森か何か障壁となるものゝあるやうな場所がよろしい。尤もその森が餘り泉水に接近し過

ざるのは禁物です。殊にそれが板塀等ですと、夏は日光が反射して、泉水の水が蒸れる恐れがあります。又泉水に樹木の枝の蔽ひかゝるのも禁物で、これは日光を妨げ、落葉が泉水に入り易い丈けでなく、葉や枝からしたゝり落つる雨垂が、金魚に大變悪いからであります。新泉水の注意——さて、かくて適當の位置が定り、泉水を造くつたからと云つて、その新しい泉水へすぐ金魚を入れてはなりません。少くも一週間は水を満したまゝで置いて、あくを抜きます。これは新しい泉水は、材料の如何に拘はらず必要なことで、特に塗泉水にこの注意が大切です。干してあつた泉水を再び使用する際も、やはり一晝夜位水を満して、一度すつかり水換をしてから使ふ方が安全であります。

又冬期泉水を乾して置くと、凍る惧れがありますから、適宜防寒法を施すか、水を満して置くかせねばなりません。

泉水と魚數——泉水に入れる魚數は、大體一疊大に當歳魚二十、二歳魚十一、三歳魚七八内外が手頃であります。一般に初心家は金魚を愛する積極的な感情から、小さい泉水に多數の金魚を入れたがりますが、實際は出来る丈け少い方がよろしく、成るべくこの範圍を越さないことです。なほ泉水に就いて一二の注意を挙げますと、泉水の縁は地面よりいくらか高くして置きます。それは萬一雨水が流れ込まぬものでもないからで、又蛙に飛び込まれたり、鼯や猫に襲はれないため適度の目の荒さの蓋をして置く事も大切です。

泥池

泥池は泥底、もしくは砂、砂利底のまの池で、大きさには一定の制限がありません。しかし餘り大きいものはやはり管理に不便ですから、大きい池はいくつにも分割した方がよろしい。又深さにも一定の制限はありませんが、泥池も金魚のためには浅い方がいゝのです。尤も泥池は鮒から進化した金魚の故郷とも云ふべき、最も棲みいゝ場所です。すから、生長も早く少し位の不都合は殆んど影響がないやうです。かく泥池は金魚に最も適した住家ではありますが、一方野生の時分の住家に近いだけ、金魚の性質もどかく野生的になり勝ちで、従つて

泥池は只金魚の大きくなるのを喜ぶ人々には理想的であります。真に金魚の風格を愛する人達には排斥されます。それに金魚の害敵に襲はるゝことも、この泥池が最も多いもので、これは泥池の一番大きい缺點であります。中で鮒、蛙等の外敵は、泥池の周囲に高さ一尺以上の竹箒をめぐらせれば防げますが、只夜間自由に翔んで来る水棲昆蟲に至つては殆んど手の下しやうがありません。

## 九 金魚と水

金魚と水質——金魚と水との関係は、恰も吾々と空氣の関係で、吾々が新鮮な空氣を要求するやうに、金魚も常に適當の新しい水を要します。そして水さへ金魚の性に合へば、餌料は別に與へずとも、金魚は長く生きてゐるもので、これを見ても、水の如何に金魚飼養に關係の深いかと解ります。しかし吾々が少しも多く新鮮な空氣を必要とするやうに、金魚も清冽な水程いゝかと云ひますとあながちさうとは限りません。金魚は例のお里が鮎でありますから、譬へ艶麗な容姿はして

居ても習性は鮎同様で、彼の普通に棲む半濁の河水が、金魚にもやはり一番住みいゝのであります。即ち清冽なまぢりけのない水よりも、交りものゝ多い濁つた水の方が却つて金魚の性に合ふのであつて、而も酸素の多分に含まれた水が、金魚には最も理想的であります。と云つて、部屋へ飾る水はあくまで清冽でなければなりません。そして小容器が度々水換を必要とするのは、要するにこの水中の酸素の缺乏を補ふためであります。

水溫——次に水溫は餘り冷くない方がよろしい。假令盛夏でも、餘り冷い水に金魚を入れるのは禁物で、井戸水や谷川の湧水等を使用する場合は、一日二日泉水、もしくは別の容器へ汲み置いたものを使用す

るやうにします。なほ井戸水は温度丈けでなく、時に有害物を含む場合  
合がありますから、初めて井戸水を使用する際には、よく注意するこ  
とです。

濁りの程度——倍て金魚には濁つた河水がいくとして、その濁つた程  
度にも、又原因にも種々の別があり、如何に濁つた河水がいくとして  
も、總ての濁水がいくと云ふのではありません。同じ濁水でも下水の  
混つた水は、有害物を含むことが多いためです。殊に注意を要  
します。又金魚を含む水や、餘り濁り過ぎた水も金魚のためによくあ  
りません。で、どの程度の濁水がいくかと云ふことは一寸云ひ現はし  
難いことではありますが、見たところ左程きたなくなく、平氣で手の

洗へる程度の河水がまづ適當でありませう。なほこゝで云ふ濁水は、  
泥水の事ではありません。泥で濁つた水は、金魚には絶対に用ひない  
ことです。

濁る原因——一體水の濁ると云ふことは、種々の交雑物のあることを  
語るもので、その種々なる交雑物中大部分を占むるものは、浮游生物  
と稱する、ごく微細な生物であります。この浮游生物は、直接間接に  
魚類——引いては金魚の食餌となりますから、その多寡は金魚の發  
育に大層影響があつて、泥池で飼養する場合特別の餌料を與へなくと  
もよろしいのは、水中にこの浮游生物が生存するからであります。尤  
も總ての浮游生物が、總て餌料になるのではありません。中には左程

必要でないものもあり、却つて害のあるものもあります。  
浮游生物——さてこれ等の浮游生物とは、一體どんな生物のことかと云ひますと、主に原生動物、甲殻類、接合植物(硅藻類、接合藻類)緑藻類等に属する微生物で、それ等はそれごとく固有の色がありますから、水中に含まるゝ浮游生物の如何に依つて、水色も自ら異なる事になります。即ち水が青色もしくは緑色の深味を帯んでゐる場合は緑藻類、接合藻類の繁殖して居ることを示し、褐色の際は硅藻、又帶黄褐色の時は一般に甲殻類の繁殖を語る所以であります。  
水色の變る理——そしてこれ等の微生物は、外界の影響に支配される事の、至極鋭敏なものでありますから、昨日迄全盛を誇つて居た種類

が、一朝にして死滅して、同時に他の種類が時を得顔に繁殖するやうな場合も稀らしくありません。これが又同一の水で、時々水色の變る原因となるのであります。尤も泉水等ではこんな著しい現象は滅多に見られません、泥池では往々見掛けることであります。そして前に云つた理由から、金魚は此等浮游生物のために満腹することもあれば、反對に非常に衰弱することもあります。  
浮游生物と投餌——それ故浮游生物の如何は、金魚の投餌上に大層關係があるもので、又金魚の保健上にも影響があります。それで今日ではまだこの方面の研究は甚だ幼稚であります、早晩如何な水色になれば水換を行はなければならぬか、又如何な色になれば投餌を控へ

ていゝかと云ふ風に、進んだ研究が現はれるやうになるでありません。  
水換の理由——水換は水が甚しく汚濁するか、金魚の鼻上げを初めた場合に其の必要があります。鼻上とは水面に頭端を現してあつぶあつぶするを云ひ、重に早朝から始めて、朝の八九時頃に終ります。これは水中の酸素の缺乏した證據で、引いて水の濁り過ぎたこと、及び金魚の衰弱してゐるのを語るものですから、早速水換を行はねばなりません。

## 十 水換と注水

### 一 水 換

水換の原理——水換の必要な場合は、水が汚れて折角の美しい金魚が見えなくなるか、水が餘りに汚れて金魚自身のためにも悪いか、又は金魚の衰弱した場合であります。一體金魚は止水に棲んで、尤も水の動揺を全然好かぬのではありません。金魚の面白い習性として、手で水を掻きまはすとか、噴水、湧水等すべて幾分水の震盪する場所へは



好んで集まるものです。殊に泥池のやうな汚い水を最も好みますから  
泉水も成るべく汚い方が金魚のためには却つてよい位でありますが、  
それでは折角の美しい金魚の見られぬ恨みがありますし、又汚い水は  
酸素の缺乏を招き勝ちで、病氣に罹り易いものですから、そこで時時  
水換の必要が起るのであります。

回数——然らば水換は月何回位が手頃であるかと云ひますと、季節  
及び時の状況、容器の大小、その人の好悪にもよつて、一概に云ふわ  
けにはゆきませんが、大體泉水なら夏期は月三四回、春秋は二三回、  
機に臨んで行つたらよろしいでせう。假令月何回と決めても、折悪し  
く雨天勝ちだとか、水が左程汚れない場合は、その通りする必要はなく

これに反し水が早く汚れたり、種々の病氣が発生した場合には規定以  
上に水換の必要を生じます。又冬季の水換は、左程必要のない上に、  
却つて不注意のために金魚を死なすことがありますから、初心家は特  
別の事情のない限り、冬季は水換をしない方がよろしい。

水換と天候時刻——水換は天氣晴朗、風のない穏かな日を選んでしま  
す。曇天、雨天の日には成るべく行はないことで、尤も病氣の発生し  
たとか云ふ特別の場合はこの限りではありません。

それから水換の時刻は、夏季は朝の涼しい内にしてもよろしいが、  
大抵は朝十時か十一時頃にします。

水換の方法——次に水換の方法であります。この際特に注意したいの

は、金魚を驚かさないうこと、前の水換の時と同一の水を用ひること  
で、同一の水と云ふのは、もし前に井戸水を用ひたら此度も井戸水、  
河水を用ひたら何時も河水と云ふ意味です。そしてその水の温度が今  
迄の水と餘り違ふのもよくありませんから、井戸水等は一日二日汲置  
きのものを用ひます。尤も暑い時分は今迄より幾分冷やかな水を金魚  
も喜ぶものです。

**金魚の掬ひ方**——以上の注意で水換を行ふのでありますが、最初水の  
澤山ある際に金魚を捕へるのは六ヶ敷いから、まづ静に水を汲み出す  
なり、はけ口のあるものは水を流し出すなりして、半分も水の減つた  
處で捕へます。但し稀に金魚は水と一緒に流れ出す惧れがありますか

ら、何か網のやうなものへ一旦水をあけるか、はけ口へ網を置いて、  
金魚を逃さぬ工夫が肝要です。殊に當歳魚、二歳魚の金魚のまだ小さ  
い時分は、一層この注意が要ります。

さて泉水の水が半減したら金魚を掬つて、別に用意した鹽かバケツ  
へ移すのでありますが、其際金魚が敏捷に逃げて捕へ難いからと云つ  
て、無闇に金魚を追ひまはすのはよくありません。慣れない中はどか  
く巧みに手元を抜けて掬へないものですが、これは不慣れた人はそつ  
と尾の方から網を持つて行くからで、頭の方からなら金魚は逃場を失  
なつて、存外容易く掬へるものです。

**掃除の仕方**——金魚が悉く掬へたら泉水の水を全く汲み出して、ざ

つと掃除します。あの泉水の底へ大皿を塗込んで置くのは、この際こゝへ最後の水を集めて汲み出す便利のためであります。掃除は今も云ふ如くごくざつとでよろしい。泉水に附着した青苔やうのものも、金魚の食物となり、且つその間には金魚の食物となる微生物が多数棲息して居るのですから、それ等も成るべく落さぬやうにそつとして置きます。掃除が済めば再び新しい水を入れますが、水深は二三寸もあれば十分であります。

**泥池の水換**——泥池は殆んど水換の必要がありません。尤も萬一水が悪變して、金魚が衰弱したやうなら、一方から新しい水を流し込み、反対側からそれだけの水を流し出すやうにして、幾分水を換へるのも

一つの方法であります。又泥池には堀抜井戸を掘ると、金魚の發育は驚く程よくなるものであります。但し害虫の非常に発生した場合とか病氣の生じた時には、早速水換をしなければなりません。

## 二 注 水

**注水の意義**——水換は全く水を換へる方法、注水は古い水の中へ、新しい水を幾らか注す方法で、而もその効力は殆んど水換と大差がありません。否一層間違ひの尠いもので、それ程水質を變へずに、新しい酸素の多い水が這入るのですから、初心家にも安心して行はれます。その上注水は金魚に清新な氣持を起させるもので、従つてこの注

水は夏期最も必要であります。

時期——其れ故注水は普通五月頃から始めて、夏期は毎日します。と云つても雨天、曇天の日には注水をする必要はありません。又注水は水換と異つて、古い水の中へ新しい水を入れるのですから、水質や温度は、水換程喧しいことはいらないもので、たゞいくらか冷たい水であればよいのです。

時刻——注水を行ふ時刻は別に一定しませぬが、普通午後の日影のかげつた即ち四時五時頃にします。その量も一定せず、毎日泉水の水量の二割三割も注すのは大變ですから、まづ普通の泉水で、眞夏の頃には手桶に冷たい水を二杯か三杯位差す程度にします。そして注水をする

前に、その分量だけ泉水の水を汲み出して置けば一層効目があります。それに泉水の水は、どんなに深くなつても、なほ縁から二三寸はある位にして置くことが肝要で、もしこの注意を怠ると、驟雨の際なごに水が溢れて、金魚も一緒に流れ出す恐れがあります。

水の濾過——以上のやうに云ふと、金魚の飼養には多量の水を要するやうであります。これは水が自由に得らるゝ場合の話で、もし水に不自由するやうなら、年中同一の水で飼養することも出来ず。と云つて何時もその儘放任するのではなく、時々その水を川砂で濾して使用するのです。ごんな濁り水でも川砂で濾せば綺麗になり、金魚に使用して少しも害のないものとなります。

## 十一 日覆と蓋と冬圍

日覆と蓋と冬圍とは、同じやうな性質のもので、三種三様の職分があります。即ち日覆は炎暑を防ぐが目的、蓋は敵を防ぐため、冬圍は寒氣を防ぐためのものであります。

### 一日 覆

時期——三四月頃の日光は、金魚にとつては寔に懐しいものであります。五月、六月と暑氣の募るに従つて、あのでかくした太陽を泉

水にまともに受けては耐りませんから、そこで日覆の必要が起ります。従つて日覆は五、六、七、八、九の五ヶ月位のもので、中でも六七、八月が最も必要な季節です。そして五月頃は日覆を用ふると云つても、たゞ朝の十時頃から午後の三時頃迄すればよろしいが、眞夏は殆んど一日日覆をしなければなりません。

装置の注意——又日覆はたゞ日光を防げばいゝのでありますが、それかと言つて容器を密蔽すると空氣の流通を妨げ、むれる恐れがあります。すから、少くも高さ二三尺乃至四五尺の棚を作るか、空氣の流通のよろしいやう目の荒い蓋をし、日覆の必要がなくなり次第、取去るやうにします。その日覆の材料は布幕、葭簀、竹簾等であります。又眞夏

以外は泉水一面にかけると必要はなく、五月頃はまづ泉水の半分もすれば十分であります。

## 二 蓋

泉水へは鼯や猫が見舞つたり、蛙が勝手に飛び込んだりしますから、それを防ぐための蓋が又必要です。その蓋は竹でも板でも金網でもよろしいが、要は蛙の入り得ぬ範圍に於て、成るべく眼を粗くして空氣の流通をよくすることです。そして以上の害敵は主に夜分に來襲しますから、夜分は必らずこの蓋をして置くやうに注意します。

## 三 冬 圍

冬圍の程度——冬圍は嚴冬の寒さから金魚を保護するものでありますから、その土地／＼によつて、程度も自ら異らざるを得ません。即ち暖い南國では、殆んど冬圍の必要がありませんが、これに反し、北國の寒い地方では十分冬圍を行はなければなりません。又場合に依つては前にも述べたやうに、冬を越すための瓶なり桶なりを用意しなければなりません。

圍ひ方——まづ普通に行はるゝ冬圍は、藁か蓆で寒い北風を防ぐための片屋根を泉水の西北側につくり、南方からは日光を十分にさし込

すやうな装置にします。かゝる冬圍は通例十一月下旬、もしくは十二月始めに行ひ、進んで泉水に厚い氷を見るやうになつたら、泉水に蓋をして、その上を菰なり、藁なりで蔽つてやります。けれど冬圍も日覆同様寒氣を防ぐための手段で、冬圍それ自體は決して好ましいものでありませんから、大した必要のない場合は、成るべく取り去るやうにします。即ち晴天の暖い日は暖い間だけ覆ひを取つて、十分泉水の水を日光と新しい空氣とに晒すやうにするのです。覆ひを久しくそのまゝにして置くと内部が蒸れて、種々の病氣が発生し勝ちですから注意を要します。

かくて寒い冬が去り、梅の散る頃になると冬圍も最早必要がなくな

りますが、急に冬圍を取り去るのも考へもので、最初は暖い日中だけ取つて、夜は又元のやうにして置くと云ふ風にし、次第に自然に薄めてゆくのです。

この冬圍に就いて今一つ注意したいのは、覆物にかゝつた雨滴の泉水に流込まぬ工夫で、すべて藁や蓆を初め、葭簣でも新しいものはあゝが出て、それが金魚に非常に悪いものですから注意することです。**小容器の防寒法**——なほ硝子瓶等の小容器のまゝで冬を越させる場合は、家の南側の成るべく暖い場所に、ちつとでも暖かいやうな工夫をしてやれば、假令氷が張つても金魚は大して弱らずに越年するものであります。

## 十二 金魚の食物

生物と食物——總て生物は如何なる方法かで食物を攝取するもので、金魚も食物なしに生育する事は出来ません。従つて金魚飼養家には、

この金魚の餌料研究が又甚だ重要であります。

鮎の食物——處で金魚は前にも屢々説く如く先祖は鮎で、習性も鮎に似ますから、金魚の食物を研究するには、まづ鮎の食物を知るのが近道であります。そこで鮎を見ると、主に稍濁つた汚い浮游生物の多い沼、池、小川等にあつて、小さい時分は浮游生物や水あか、及び小生

物を食べて生長し、大きくなれば以上のほか小魚や、昆蟲、昆蟲の幼蟲、小さい貝類その他様々の小水棲動物、及び泥中の滋養分を攝取して居ます。

金魚の食物——金魚もやはりこれ等の食物を食べるもので、従つて別に我々が餌料を與へる必要はないやうであります。限られた容器の中にある金魚は、野生の鮎の如く十分自由に食物を漁るわけにゆきませんから、そこで我々が食物を補給して、十分生長させる必要が起るのです。

併し無論金魚は水中にある食物も攝取しますから、容器の如何によつて、食物補給の程度も自ら異ならざるを得ません。即ち泥池は自然



に澤山の食物がありますから泉水より控へ目に與へてよろしいが、但し餌料を與へるのは、生育に不足な食物を給するのみでなく、迅速に且つ安全に生長させるためでもありますから、其の邊も考慮に入れて與へなければなりません。

餌料の二大別——さてその補給する食物も、自然に池水で得らるゝやうな食物が一番自然でよいのでありますが、それ等は容易に得難かつたり、取り扱ひに不便だつたりしますから、色々手軽に得られる食物が代用されてゐます。それ等の餌料を大別して、普通生餌、煉餌の二つとしますが、こゝでは便宜上動物質の餌料と、植物質の餌料とに分けて説きます。

### 一 動物質の餌料

前に述べた意味から、動物質の餌料は金魚に最も適した食物です。これを又分つて生餌と雑の二種とします。前者はみぢんこ、子子、あかこ其他の生餌を、後者は魚肉、蠶の蛹、玉子等を指すのです。

一、微塵子——みぢんこは恰度金魚が孵化する五六月の候、やゝ汚い水溜りに大抵生ずるもので、その時分苗代等の幾分汚い水中をちつと覗いて居ると、ごく小さい褐色の粉のやうなものが無數に浮動してゐるのを見出す事がありますが、これが即ち金魚の大好物のみぢんこなのです。節足動物甲殻類に屬し、顕微鏡で見ると小さいながら蝦や蟹とほ

と同じ身體付をして居ます。非常に繁殖力が旺盛で、四圍の事情が生存に適すると、數日ならずして幾百萬と云ふ驚くべき多數に蕃えます。何分微細なものだから、金魚の孵化した當座、まだどんな食物も口へ入らぬ時分の大切な餌料で、金魚の仔魚はこれを喜んで追ひまはしながら食べるものです。このみぢんこが容易に手に入らない場合には、泉水か、その他の器へ水を満し、馬糞をいくらか入れて置くこと、大抵數日後には發生します。馬糞の手に入らぬ場合は、米とぎ水、油糟、鯀糟などを少し入れて置いても、大概は生ずるものです。みぢんこを金魚に與へるには、まづ布片で小さい網をつくつて、みぢんこを掬つて來るのでありますが、みぢんこと一緒に他の雜物がありますから、

目の細い篩とか、蚊帳布の中へ採取して來たみぢんこを入れ、みぢんこだけその網目から泉水へ抜け出させれば、泉水がよごれなくてよろしい。

二、子子——子子は人の熟知する蚊の幼蟲で、十分生長すると三四分あります。これも金魚の好餌で、みぢんこを食べてやゝ大くなつたものから、十分生長した金魚迄喜んで食べます。子子は春から秋の間溜水中には普通に何處にも存在するもので、蚊の發生する土地なら、必つと居るのですから、これは自然に發生したものを集めて金魚に與へます。

三、あかこ——子子が時とすると大都會の真中で得られない反對に、

あかこは都會に却つて得易く、田舎では一寸見あたらないことがあります。全くあかこはどんな大都會でも、今日の日本の都會なら屹度容易に得られるもので、即ち東京でも、下水とか溝を探せば、必つとその多數を見出す事が出来ます。あかこはみゝずと同じ環節動物中の毛足類に屬し、かの下水等の浅い水底から、眞赤な細い糸のやうなものが一面に出て盛んに揺いて居るのが、このあかこであります。あかこは物に驚けば土中深く隠れる習性がありますから、採集するにはその群の盛んに動揺して居る最中に、突如泥土と一緒にかき上げるが一番便利です。そしてそのまゝ、瓦か板に載せて天日に乾すと、あかこは最内部に一塊になつて集りますから、暫時の後土を碎いてあか

こを取出すのです。あかこも金魚の好餌料で、當歳から十分生長したものも喜んで食べます。

四、赤蟲——適當の名稱がないから、體色に因んで假りに赤蟲としました。赤蟲は泉水の青苔の中に筒のやうな管を造つて住んで居たり、溝に裸のまゝ群生する赤紫色の小蟲で、これは蚊に似た搖蚊と云ふ昆蟲の幼蟲です。子子に似て一層細長く、一名赤ぼうふらとも云ひます。あかことは全然違つて、彼よりも太く短く、ごちらかど云ふと、子子をやゝ細長くしたやうなもので、子子同様金魚の好餌料であります。

五、貝類——たにし、ひらまきがひ、からすがひ等の淡水産貝類の幼

貝、及びごく小さい貝類は、又金魚の喜ぶ食物で、これ等の貝を細く砕いて與へても金魚は大喜びで食べます。

六、魚肉——魚肉類も又金魚の好くもので、食膳に上つた残肴、所謂魚のあらを與へても非常に喜ぶものです。但し食膳に上つたまゝでは鹽氣が非常に多いものですから、一度煮出すか、數時間水に浸すかして、鹽氣を去つてから與へます。なほ魚肉は一般に脂肪分の少い軽いものが金魚の餌料には適します。

七、玉子——茹玉子の黄身は、孵化當時の仔魚の唯一の餌料で、まだ仔魚がみちんこも食べ得ぬ孵化した時分、この黄身を水に溶いて、そつと泉水に落しますと、仔魚は大喜びで食べます。このほか産卵前の

親魚に、この黄身を與へて肥満らす人もあります。

八、蠶の蛹——鯉、鰻などの川魚養殖には盛んにこの蛹が用ひられて、泥池の金魚にも使はれますが、脂肪分の多いものですから、餘り多量に與へることは考へるべきです。又この蛹を乾して粉末にしたものは仔魚の餌料に用ひられます。

## 二 植物質の餌料

一般的には植物質の餌料は動物質のものに劣りますが、得易くもあり、それに取扱ひが便利です。最も普通にも用ひられます。

一、大麥——一度水煮にしたものを細く砕いて與へると喜んで食べま

す。

二、金魚麩——誰も知る金魚の喜ぶものです。それに麩は水面に浮んでゐて、金魚も水面へ出て來ますから、金魚を観賞するには誠に都合のいい食物です。白い麩の周圍に、澤山の赤い金魚の集つて居る様は繪のやうな情趣のあるものです。

三、麵類——素麵、うどんも金魚は喜んで食べます。この白い長い素麵やうどんを引きずりながら、すき透つた水中で金魚の戯れてゐる様を眺めるのも、美しく且つ愉快なものです。麵類は生のまゝより、成るべく一度湯煮したものを與へた方がよろしい。

四、麥粉菓子——せんべい其他麥粉製の菓子も麥同様金魚は喜んで食

べます。

五、ふすま——小麥粉を製くる際出るこのふすまも金魚の喜ぶもので一度熱湯で煉るなり、煮るなりして與へれば更によろしい。

### 一三 餌料の與へ方

控へ目——餌料は成るべく控へ目に與へることで、拙手に餌料をやる  
と却つて金魚を害し、金魚を死地に陥し入れるのは屢々前に説いた通  
りです。それに餌料を澤山與へると——生餌は別ですが——とかく食  
残しを生じ、それが腐敗して水を汚す惧がありますから、殊に小容器  
で飼養する場合は、この給餌に注意を要します。  
時刻と同數——で、始めて金魚を飼ふ人には、一寸見當がつかぬかも  
知れませんが、まづ朝晝二回、少し残る位の程度で與へ、午後三時過

にその残つたものは全部取り去るやうにするのが一番安全です。  
季節と天候——それに金魚は季節及び天候の如何に依つても食物の量  
は一定しないもので、一年中で一番澤山食へるのは春暖の四五月頃と  
やゝ涼しくなつた秋とです。冬の寒い間は殆んど絶食の姿、又雨天曇  
天等の天候不良の日も食欲はすつと減ります。その上容器によつても  
食分量は違ふもので、飼養者はそれらの場合に鑑みて、餌料の分  
量を定めなければなりません。併し大體春から夏、秋にかけて梅雨期  
を除き、元氣な魚なら當歳魚は頭の大さ程、二歳魚は頭の二分の一大  
位の餌料を平均毎日食ふものと思へば間違ひありません。  
夏季の注意——夏季は餌料の腐敗し易い時期ですから、特にこの點に

注意して、成るべくこの季節には腐敗し易い餌料は與へないことです。然もなほ泉水が腐敗した餌料のために濁るやうなら、早速水換を行います。

與へる場所——それからこれは大きい泉水の話であります。餌料を與へる時刻と、場所とは成るべく一定して置いた方がよろしいもので、さうするとその時刻になると、その場所へ金魚が集つて来て、非常に娛しみなものです。

#### 一四 産卵及びその前後

金魚飼養家にとつて、何が一番嬉しいかと云つて、産卵する位樂しみなものはありません。

鮎の産卵——總て生物は春暖に向ふと同時に、今迄酷寒のために虐げられて居た生活意識が頭を擡げて、種族繁榮の計をめぐらすものであります。鮎は前にも云ふ通り、四月末から五六月頃の雨あがりの暖かな氣持い、朝、成るべく淺瀬の方へ出て来て産卵するもので、そんな朝未明に池や沼へ行つて見ますと、ばあしやばあしや、浮藻浮草の

間を一團となつた鮒が水音をたてながら活動して居るものです。その時分はまだ四圍は深い霧が立罩めて居ますが、その霧の次第に薄れ行くに比例して、鮒の活動も次第に寂れ、竟に十時十一時頃には全く元の静寂に還つて仕舞ひます。

産卵の時期、回数——金魚の産卵もその年に依つて多少の相違はありますが、大體四月下旬に始まつて、七月頃に終るものです。そして第一回の産卵後十日なり五日なりして又産卵し、再び身體が回復すると産卵すると云ふ風に、自然のまゝに放任すると、一春六七回も産むものです。産卵の時刻も鮒と略同様で只第二回、第三回と回数に累むに従つて、朝は早くから産み出して、早く終るやうになります。

産卵の徴候——さて金魚は八十八夜前後になると、色彩がめつきり鮮かになつて艶もよく、何處となく落つかぬ様子が有り、時々二三匹づつ思ひ出したやうに、追つこしたりします。これは金魚に産卵期が訪づれた前徴で、かゝることのあつた数日中には必つと産卵するものであります。併しかうして自然のまゝに産卵させたものは、とかく早産の氣味があつて、孵化率が少く、譬へ孵化しても仔魚が弱かつたりしますから、豫め種々の注意が要つて、第一は親魚の選擇です。

親魚の選定——親魚は云ふ迄もなく十分生長した強壯な魚でなければなりません。さもないと産卵も不完全、受精も不十分に終つて、孵化率が少く、假令孵化しても虚弱なものが生れ、あまつさへ親魚迄が衰



弱して死ぬことがあります。で親魚として最も適当なものは三歳魚、四歳魚で、これに反し二歳魚の仔は色の變化が遅く、且つ半分は尾緒の發達の悪いものが生れます、一方五歳、六歳と老年になつても矢張り結果は思はしくないので、色の變化の遅いのは、色艶の悪いことを意味します、

次に注意すべき點は親魚の色彩及び風貌であります。親の習性形態は、その子供に必然遺傳するのでありますから、いゝ魚を得やうとするには、勢ひいゝ親魚を求めなければなりません。而して一般に形態上の特色は父體から遺傳し、母體からはその性質を享受すると云はれて居ます。

**雌雄の見分け方**——然らば金魚の雌雄の見分け方如何と云ひますと、これは容易なやうで、その實仲々困難な仕事です。併し少しく金魚に親しめば、自らその容姿によつて雌雄は辨別さるゝものであります。又交尾期には雄に限つて、胸緒に追星と云ふ星形の斑點が生じますからそれでも雌雄は判ります。なほ大體雌雄の異なる點を挙げますと、雄は何處となくすつきりした處があり、比較的體は細長く、従つて腹部の丸味も少なく、鼻筋平たく鰭や尾はつんとして居ます。これに反し雌は何處となく柔味があり、尾や鰭もふうわりとして居て、腹部は大きく、晩秋にもなると一層それが甚だしく、掌にのせて靜かに觸れると、恰も真綿にでも觸れたやうな感じがします。

親魚の飼ひ方——もし完全を期するなら、親魚は前年の秋から特別に飼育しなければなりません。そして雌雄は成るべく別々にして、もし容器のない場合は、泉水を二分して入れて置きます。これは生殖力の亂費を阻止し、且つ適當の時期に産卵させ得る等の利益があるからです。又親魚の飼養中特に注意したいのは、大事がつて懦弱にせぬ事です、水換も水の濁つた場合のほかは他と異なつてする必要はなく、餌料も成るべく自然に近いものを控へ目に與へるやうにします。かくて愈々産卵の季節が近づいたら、數日間餌料を控へ目にして、産卵の前日に十分餌料を與へます。

産卵池——親魚のかく用意さるゝと同時に、一方産卵池の準備にかゝ

らねばなりません。即ち別に泉水なり、瓶なり、泥池なり、産卵させる場所を準備して、置かねばなりません。その位置は日當りのいゝ金魚を飼養する諸條件に最も適つた場所を選び、數日前から水を汲み込んで置いて、産卵前日の午後、更に幾分の注水をし、そして親魚を適宜の數だけ入れます。容器の大きさは、まづ徑二尺以上あれば金魚は大丈夫産卵するもので、水深は二三寸で十分です。萬一特別の産卵池を用意する事の出来ない場合は、産卵の前日水換をして、雌雄の隔を除いてやりますと、翌朝はきつと産卵するものです。

産卵と天氣——然し金魚はお天氣の悪い日には絶対に産卵しませんから、天氣模様を見定めて、晴天となる見込みのついた日に、初めて産

卵させる段取りにしなければなりません。それに産卵後の天候も卵の發育に大變關係がありますから、なるべくお天氣の續くらしい折を見て産卵させることで、殊に孵化間に氣候が激變すると、全滅の憂目を見ることがあります。

**雌雄の組合せ方**——雌雄の組合せ方は、雌一に雄二、又は雌二に雄三等、何れでもよろしいが、普通一尾の雌を數尾の雄が追ふものですから、雌より雄の數を多くするのが自然です。

**金魚藻**——産卵池の準備と同時に、いやそれ以前に、卵を産附ける材料を準備することが大切です。それには金魚藻が一番いゝやうで、金魚藻は又の名を聚藻とも云ひ、總のやうにしなやかな藻で、細い莖の節

々から線狀の葉が多數輪生して居ます。一見猫の尾のやうな趣きがあつて、沼、池、澤、小川の底から伸びて居ます。少しく暖かくなると見る／＼生長して金魚の産卵する頃には、十分その役目を達し得るやうになります。

**藻の危険**——けれどもこの藻をすぐ金魚の産卵に用ひるのは考へもので、仔魚を害する種々の小生物や、その卵が附着して居ないとも限りませんから、少くも半月位は別に用意した泉水に貯へて置く必要があります。かの時々金魚でない魚が出來たり、昆蟲の幼蟲が発生して、孵化したばかりの仔魚を食ひ荒らしたりするのは、この藻に其等の卵が附着して居たからです。

柳の根——これは金魚藻に次いで廣く使用されるもので、柳のある河岸から、水のために洗はれた鬚根を採取して、恰も金魚藻のやうに使用するのです。金魚藻と違つて柳の根は、天日に乾して、附着して居る害虫や害虫の卵を殺す事が出来ますから、その點は更に理想的で、かく數日間天日に乾したら一旦水に浸して、それから産卵池に入れてやります。

入れ方——如何な風に産卵池へ入れてやるか云ひますと、第一金魚は水面近く浮ぶ物體に産卵する習性がありますから、その心得で水面近く置くことが大切で、藻は根元を一錢銅貨大に束ねて結へ、總のやうに泉水に浮すか、その根元に小石を結へて底から自生するやうにふ

らわり浮ばせます。次に柳はその儘では水中に沈みますから、繩に一つづつ挟んで、その繩の兩端を沈まぬやうに支へて置きます。

卵の容器——これで産卵の總ての準備は終つた譯けですが、なほ最後に産卵してからその卵の附いた藻や柳の根を入れる容器が要ります。前にも述べたやうに、金魚は數回産卵するもので、その回数だけ卵の容器も要りますが、その上孵化した仔魚は生育がまち／＼で、大中小に三分したり、或は二分して飼育しなければなりませんから、容器は豫想外に澤山要るやうになるのです。この容器にもやはり數日前から水を汲み込んで、日當りや空氣の流通のよい、そして風の餘り當らぬ場所に置きます。水深は一寸五分乃至二寸もあれば十分で、成